

長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路新築工事に伴う長岡京跡・上里遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

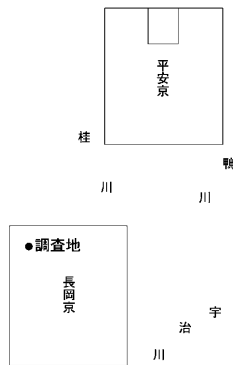
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 5 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡
長岡京右京第 878 次調査（7 AN UKW・UMI-2・GKW-2 地区）
- 2 調査所在地 京都市西京区大原野上里南ノ町地内・長岡京市井ノ内北裏
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2006 年 6 月 12 日～2007 年 3 月 16 日
- 5 調査面積 3,329 m²（C 区：2,137 m²、D・E 区：1,192 m²）
- 6 調査担当者 上村和直・卜田健司・津々池惣一・南出俊彦
- 7 使用地図 図 1 は、国土地理院発行の 1：50,000 地形図「京都西南部」を参考にし、作成した。その他の図は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「石見」・「粟生」を調整して使用した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子が担当したが、一部は調査担当者が撮影した。
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 上村和直・南出俊彦
- 17 執筆分担 1～3：上村、4：南出、5-(1)・(2)：南出、5-(3)：上村
- 18 編集・調整 中村 敦・児玉光世・山口 眞
- 19 発掘調査中、以下の方々にご助言を得た。
泉 拓良氏・清水芳裕氏・千葉 豊氏（京都大学）



(調査地点図)

目 次

1. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査経過	2
2. 遺 跡	4
(1) 遺跡の位置と環境	4
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 層序と遺構の概要	7
(2) 縄文時代の遺構	8
(3) 弥生時代の遺構	15
(4) 古墳時代の遺構	18
(5) 長岡京期の遺構	19
4. 遺 物	25
(1) 遺物の概要	25
(2) 縄文時代の遺物	26
(3) 弥生時代の遺物	32
(4) 古墳時代の遺物	37
(5) 長岡京期の遺物	37
5. ま と め	40
(1) 縄文時代の上里遺跡	40
(2) 弥生時代の上里遺跡	41
(3) 長岡京期の遺構	42

図 版 目 次

図版1	遺構	D・E区縄文時代遺構平面図(1:250)
図版2	遺構	C1・4区弥生時代・古墳時代遺構平面図(1:250)
図版3	遺構	C2・3・5区弥生時代・古墳時代遺構平面図(1:250)
図版4	遺構	D・E区弥生時代遺構平面図(1:250)
図版5	遺構	C1・4区长岡京期遺構平面図(1:250)

- 図版 6 遺構 C 2・3・5 区長岡京期遺構平面図（1：250）
- 図版 7 遺構 D・E 区長岡京期遺構平面図（1：250）
- 図版 8 遺構 1 調査地全景（北西から）
2 D・E 区縄文時代遺構全景（西から）
- 図版 9 遺構 1 D 区竪穴住居 3175（北東から）
2 竪穴住居 3175 床面地床炉（北から）
3 竪穴住居 3175 床面遺物出土状況（北東から）
- 図版 10 遺構 1 D・E 区竪穴住居 3223（西から）
2 E 区竪穴住居 200・240（北西から）
- 図版 11 遺構 1 D 区竪穴住居 3234（西から）
2 D 区竪穴住居 3205（西から）
- 図版 12 遺構 1 D 区竪穴住居 3272（北西から）
2 E 区竪穴住居 149（北西から）
- 図版 13 遺構 1 D 区北東部土器棺墓群（東から）
2 D 区南東部土器棺墓・土壙墓群（北西から）
- 図版 14 遺構 1 D 区土器棺墓 3164（北から）
2 D 区土器棺墓 3165（北西から）
3 D 区土器棺墓 3196（西から）
4 D 区土器棺墓 3143（南東から）
5 D 区土器棺墓 3178（東から）
6 D 区土器棺墓 3159（東から）
- 図版 15 遺構 1 D 区土壙墓 3253（北東から）
2 D 区土壙墓 3158（北西から）
3 D 区土壙 3156（北から）
4 E 区土壙墓 166（西から）
- 図版 16 遺構 1 C 1～5 区弥生時代・古墳時代遺構全景（西から）
2 C 3 区弥生時代遺構全景（西から）
- 図版 17 遺構 1 C 5 区弥生時代・古墳時代遺構全景（東から）
2 D・E 区弥生時代遺構全景（東から）
- 図版 18 遺構 1 D 区土器棺墓 3066（東から）
2 D 区土器棺墓 3067（東から）
3 D 区土器棺墓 3153（北から）
4 D 区土器棺墓 3138（北東から）
- 図版 19 遺構 1 C 3 区土壙 1209（西から）
2 C 3 区土壙 1258（北から）

- 3 C 3区土壙 1490 (北西から)
- 図版 20 遺構 1 C 1～3区長岡京期遺構全景 (西から)
2 C 5区東部長岡京期遺構全景 (東から)
- 図版 21 遺構 1 D・E区長岡京期遺構全景 (東から)
2 C 3区掘立柱建物 1060 (西から)
- 図版 22 遺構 1 D区掘立柱建物 3003 (東から)
2 D区掘立柱建物 3003・3057 (東から)
- 図版 23 遺構 1 E区掘立柱建物 9 (北東から)
2 掘立柱建物 1060 柱穴 (北東から)
3 掘立柱建物 1060 柱穴 (北東から)
4 掘立柱建物 9 柱穴 (北から)
5 掘立柱建物 9 柱穴 (北から)
- 図版 24 遺構 1 C 1区柵 68 (西から)
2 D区柵 3087 (南東から)
- 図版 25 遺構 1 C 2・3区一条大路南側溝・築地・内溝 (西から)
2 C 1・2区一条大路・西三坊坊間小路交差点 (南西から)
- 図版 26 遺構 1 C 1・2区西三坊坊間小路 (北から)
2 D区一条大路南側溝・内溝 (東から)
- 図版 27 遺構 1 D区一条大路内溝遺物出土状況 (南西から)
2 D区調査区東断面 (北西から)
- 図版 28 遺物 縄文時代土器棺 (2～8)、土壙墓出土縄文土器 (9・10)
- 図版 29 遺物 1 竪穴住居 3175 出土縄文土器 1
2 竪穴住居 3175 出土縄文土器 2
3 竪穴住居 200 出土縄文土器
- 図版 30 遺物 1 土壙 3195 出土縄文土器 (32～37)、各遺構・包含層出土縄文土器 (38～44)
2 土壙 3213 出土縄文土器
- 図版 31 遺物 1 土壙 3282 出土縄文土器
2 落込み 3254 下層出土縄文土器
- 図版 32 遺物 縄文時代石器
- 図版 33 遺物 弥生時代土器棺
- 図版 34 遺物 1 各遺構・包含層出土弥生土器 1
2 各遺構・包含層出土弥生土器 2
- 図版 35 遺物 1 各遺構・包含層出土弥生土器 3
2 各遺構・包含層出土弥生土器 4

図版 36 遺物 長岡京期土器

図版 37 遺物 長岡京期土器・軒丸瓦・柱

挿 図 目 次

図 1	長岡京と調査地点図 (1 : 50,000)	1
図 2	調査前全景 (西から)	2
図 3	作業風景 (西から)	2
図 4	調査区配置図 (1 : 1,500)	3
図 5	今回の調査地と周辺の調査 (1 : 5,000)	5
図 6	調査区土層図 (1 : 100)	8
図 7	竪穴住居 3175 実測図 (1 : 100)	9
図 8	竪穴住居 3223 実測図 (1 : 100)	9
図 9	竪穴住居 200・240 実測図 (1 : 100)	10
図 10	竪穴住居 3234 実測図 (1 : 100)	10
図 11	竪穴住居 3205 実測図 (1 : 100)	11
図 12	竪穴住居 3272 実測図 (1 : 100)	11
図 13	竪穴住居 149 実測図 (1 : 100)	11
図 14	土器棺墓 3164 実測図 (1 : 20)	12
図 15	土器棺墓 3164 据置き状況図 (1 : 20)	12
図 16	土器棺墓 3165 実測図 (1 : 20)	12
図 17	土器棺墓 3165 据置き状況図 (1 : 20)	12
図 18	土器棺墓 3196 実測図 (1 : 20)	12
図 19	土器棺墓 3196 据置き状況図 (1 : 20)	12
図 20	土器棺墓 3178 実測図 (1 : 20)	12
図 21	土器棺墓 3178 据置き状況図 (1 : 20)	12
図 22	土器棺墓 3143 実測図 (1 : 20)	13
図 23	土器棺墓 3159 実測図 (1 : 20)	13
図 24	土器棺墓 3159 据置き状況図 (1 : 20)	13
図 25	土壇墓 3253 実測図 (1 : 20)	14
図 26	土壇墓 3158 実測図 (1 : 20)	14
図 27	土壇 3156 実測図 (1 : 20)	15
図 28	土壇 3156 石積み状況図 (1 : 20)	15
図 29	土器棺墓 3067 実測図 (1 : 20)	15

図 30	土器棺墓 3066 実測図 (1 : 20)	16
図 31	土器棺墓 3066 据置き状況図 (1 : 20)	16
図 32	土器棺墓 3153 実測図 (1 : 20)	16
図 33	土器棺墓 3153 据置き状況図 (1 : 20)	16
図 34	土器棺墓 3138 実測図 (1 : 20)	17
図 35	土器棺墓 3138 据置き状況図 (1 : 20)	17
図 36	土壙 1209 実測図 (1 : 40)	17
図 37	掘立柱建物 1060 実測図 (1 : 100)	19
図 38	掘立柱建物 1646 実測図 (1 : 100)	20
図 39	掘立柱建物 3003 実測図 (1 : 100)	21
図 40	掘立柱建物 3057 実測図 (1 : 100)	22
図 41	掘立柱建物 9 実測図 (1 : 100)	23
図 42	縄文土器実測図 1 (1 : 4)	27
図 43	縄文土器実測図 2 (1 : 4)	28
図 44	縄文土器実測図 3 (1 : 4)	29
図 45	縄文時代石器実測図 1 (石鏃は 1 : 2、他は 1 : 4)	30
図 46	縄文時代石器実測図 2 (1 : 4)	31
図 47	弥生土器実測図 1 (1 : 4)	34
図 48	弥生土器実測図 2 (1 : 4)	35
図 49	弥生土器実測図 3 (1 : 4)	36
図 50	長岡京期土器実測図 (1 : 4)	38
図 51	軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	39

表 目 次

表 1	遺構概要表	7
表 2	遺物概要表	25
表 3	一条大路南側溝座標表	43

長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、京都市建設局街路部街路建設課による、I・II・3 伏見向日町線道路新築工事に先だって実施したものである。調査地は、京都市西京区大原野上里南ノ町地内、および長岡京市井ノ内北裏に所在し、長岡京および上里遺跡の範囲内にあたる。長岡京の調査としては、右京第 878 次調査 (R 878) となる。¹⁾

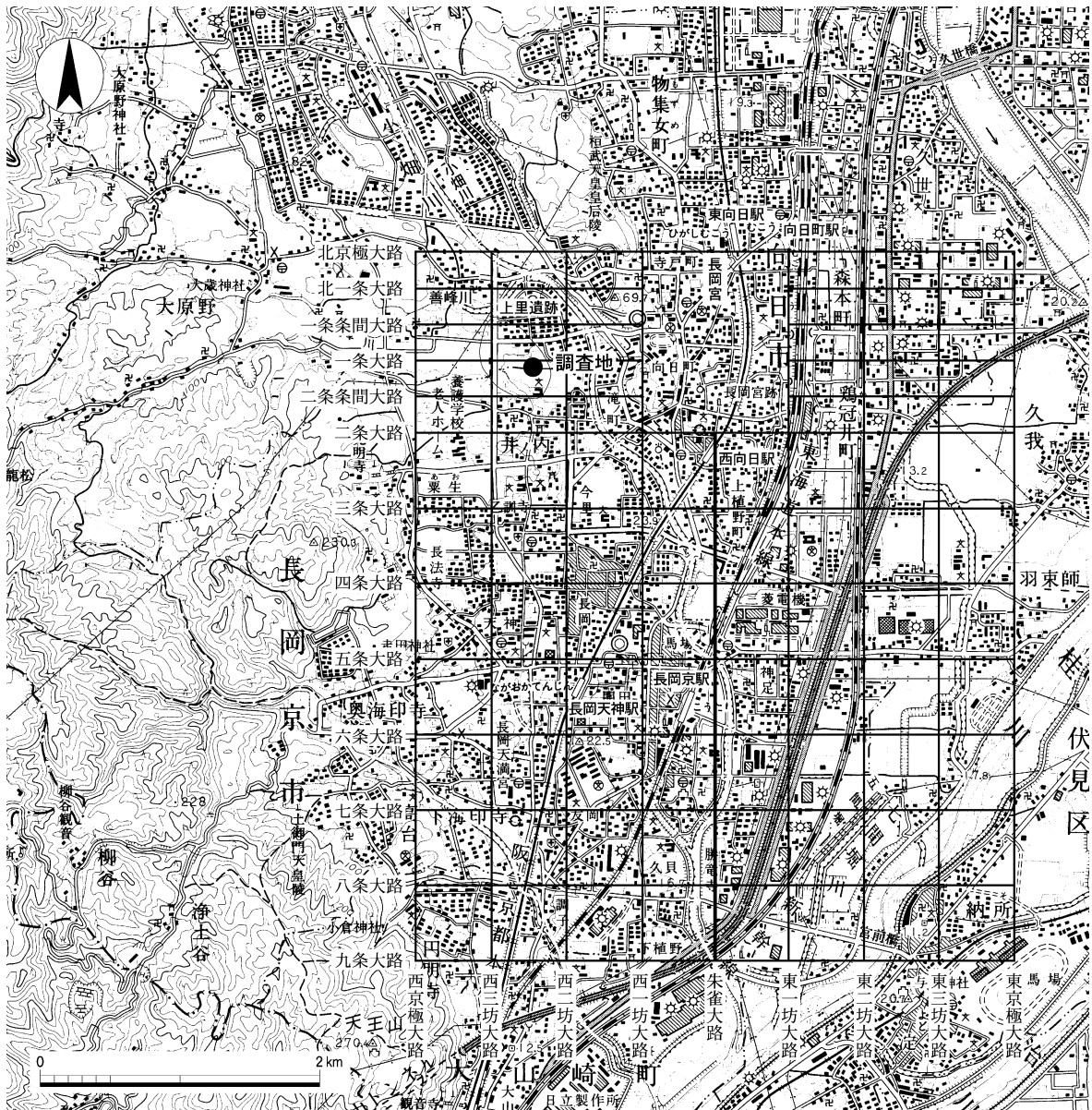


図1 長岡京と調査地点図 (1 : 50,000)

(2) 調査経過

調査範囲 調査対象範囲は、2005年度伏見向日町線の調査地（R 850）から東側の水田地帯で、道路予定地の南北幅約 32 m、東西約 135 m、面積約 4,320 m²の範囲である。対象地内には、西側と中央付近に南北方向の農道があり、これを除き調査区を設定した（図 4）。

調査目的 発掘調査の目的は、① 長岡京の条坊復元推定によると右京二条三坊八・九町にあたり、さらに一条大路、西三坊坊間小路が含まれ、これらの遺構の検出を行う。② 縄文時代から中世に至る遺跡である上里遺跡にあたり、これらの遺構の検出を行う。③ これまでの周辺遺跡の調査と併せ、当地域（大原野地域）の土地利用状況の変遷を解明する。

調査経過 調査開始前に、周辺の農道・水路などの保全対策などを行い、その後重機・大型車両進入のための仮設道を、調査対象地内南側に幅 5.0 m で造成した。

調査区は、中央農道の西側を C 区、東側を D・E 区とし、さらに C 区は農道・水田段差に合わせて、C 1 区・C 2 区・C 3 区に分けた。

C 区 C 3 区の重機掘削を開始し、順次西へ進めた。第 1 面まで耕作土・床土を排除し、長岡京期・長岡京期以降の遺構を同一面上で検出した。まず長岡京期以降の遺構・攪乱を人力で掘削し、その後長岡京期の遺構を検出・調査した。遺構が南に広がるため、C 1 区の南側の仮設道を撤去し C 4 区を設定し、これも第 1 面まで掘削し、調査を行った。その後、全景写真撮影・平面実測などの記録作業を実施した。9 月 2 日には現地説明会を開催し、成果の公開に努めた。これには約 130 名の参加があった。その後、C 1 区中央から C 2・C 3 区にかけて長岡京期の落込・包含層の掘下げを実施し、合わせて第 2 層を重機および人力で掘削し、第 2 面で古墳時代・弥生時代の遺構を検出・調査し、全景写真撮影・平面実測などの記録作業を実施した。これと平行して C 2・C 3 区の南側に C 5 区を設定し、同様の調査を実施した。その後、断ち割りなどの補足調査を実施し、埋め戻しを行い作業を終了した。

D・E 区 C 区の調査と重複し、D・E 区周辺の農道・水路などの保全対策などを行い、重機・大型車両進入のための仮設道を造成した。重機掘削を開始し、第 1 面まで耕作土・床土を排除し、弥生時代・長岡京期・長岡京期以降の遺構を同一面上で検出した。まず長岡京期以降の遺構・攪乱を人力で掘削した。その後、長岡京期の遺構を検出・調査し、全景写真撮影・平面実測などの



図2 調査前全景（西から）



図3 作業風景（西から）

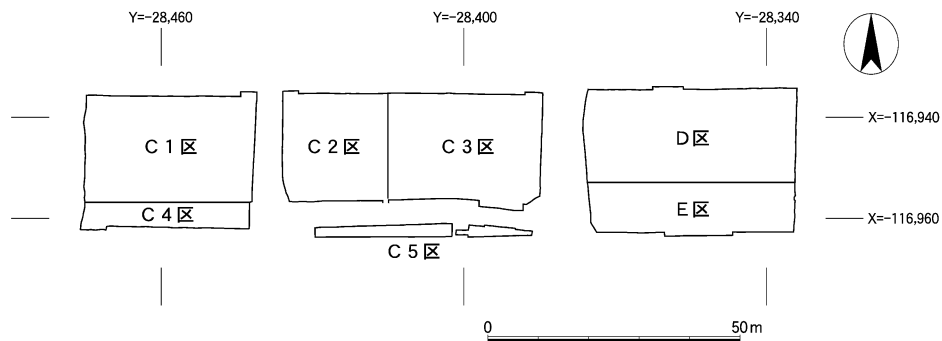


図4 調査区配置図（1：1,500）

記録作業を実施した。その後、同一面で弥生時代の包含層を部分的に掘削し、弥生時代の遺構を検出・調査し、全景写真撮影・平面実測などの記録作業を実施した。

さらに、下層遺構確認のため調査区周囲に断ち割りを行ったところ、下層で縄文時代の包含層・遺構面（第2面）を確認した。このため、D・E区東半部を掘り下げ、縄文時代の遺構を検出・調査し、全景写真撮影・平面実測などの記録作業を実施した。2007年2月24日には現地説明会を開催し、成果の公開に努めた。これには約300名の参加があった。その後、北東部の落込などを掘り下げ、平面実測などの記録作業を実施した。最後に再度、調査区周囲の断ち割りなどの補足調査を実施し、断面図を作成して調査を終了した。

なお、縄文時代の遺構は現状で保存されることとなり、住居・墓などは土嚢で養生し、まさ土を埋め、遺構面全体はまさ土を厚さ約0.3mで覆って、埋め戻し保存措置を講じ、すべての作業を終了した。

註

- 1) 長岡京の調査回数については、長岡京連絡協議会の協議によって、調査回数の前に、宮はP、右京はR、左京はLを付し、通し番号で表す。本書もこれに準ずる。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

地理的環境 調査地は、西山丘陵から東へ派生した扇状地と、小畑川により形成された低位段丘との間に立地する水田地帯である。調査地の標高は、西で 36 m・東で 34 m で、北西から南東へ緩やかに傾斜した地形を呈する。南西側には西山からの低い丘陵が東へ張り出し、竹林を形成する。東側の小畑川までは約 300 m あり、北方約 600 m には善峰川と小畑川の合流点がある。

歴史的環境 調査地は、縄文時代から中世に至る複合遺跡である上里遺跡に含まれる。調査地の西側には古墳時代後期の芝古墳群、南西側には古墳時代後期の井ノ内古墳群や井ノ内稲荷塚古墳、南側には縄文時代後期から中世までの集落跡である井ノ内遺跡が位置する。さらに南側には、長岡京遷都以前における乙訓地域の中心地とされる乙訓寺や、乙訓坐火雷神社とされる角宮神社が所在する。延暦三年（784）に長岡に遷都されると、この地域も長岡京右京北西部の中に含まれるに至った。

(2) 周辺の調査

これまで、調査地周辺では多くの発掘調査などが行われているが、ここでは、時代別に今回の調査に係る主要調査の概要を記す。

縄文時代 調査地西側の R 772 調査 A 1・A 2 区では、縄文時代晩期（長原式）の土器棺墓や土壙墓を検出した¹⁾。調査地西北西側の R 746 調査で縄文時代晩期から弥生時代前期の柱穴状遺構と土器・石器が出土した²⁾。調査地南西側の R 830 調査で縄文時代中期の土壙を検出³⁾、南側の R 25 調査で縄文時代後期の土壙・柱穴などを検出した⁴⁾。

弥生時代 調査地西側の R 772 調査では A 1～A 4 区で弥生時代の方形周溝墓・溝・流路、A 7・A 8 区では溝、B 4・B 5 区では溝・流路を検出した。調査地南側の R 22・R 25 調査では、土壙から縄文時代後期の土器片と弥生時代前期（畿内第 I 様式新段階）の土器や石鏃・サヌカイト剥片が混在して出土した。調査地南東側の R 285 調査では、弥生時代の方形周溝墓を検出した⁵⁾。

古墳時代 調査地に西接する R 772・R 775・R 850 調査では古墳時代中期（5 世紀末）から後期（6 世紀末～7 世紀初）の竪穴住居・掘立柱建物・区画溝・流路などを検出した。R 775・R 850 調査では、竪穴住居群が廃絶した後に、掘立柱建物群が造られる。また、R 850 調査東端では弧状の溝を検出し、当該期の集落の東を限る溝と考えた⁶⁾。調査地南側の R 22・R 25 調査では、古墳時代後期の流路・土壙、調査地南西側の R 830 調査では、古墳時代後期（6 世紀末）の竪穴住居・掘立柱建物の一部、R 27 調査では竪穴住居、R 107 調査で古墳時代後期（6 世紀後半から 7 世紀初頭）の土壙墓などを検出した⁸⁾。

長岡京期 調査地に西接する R 772・R 850 調査では、一条大路南側溝を検出し、R 775・R 850 調査では、西三坊大路西側溝を検出し、大路に東面して四脚門・築地が造られたことが明らかとなった。

R 850 調査では、右京二条三坊十六町で掘立柱建物・柵・井戸などを検出し、右京二条三坊九町では掘立柱建物・柵などを検出した。九町では建物の造られた部分のみ、一条大路南側に築地・内溝が存在したことが明らかとなった。調査地西北西側の R 746 調査では、一条条間南小路を検出し、この地域では東西条坊道路が西京極大路付近まで施行されたことが判明した。調査地南南側の R 22・R 25 調査では、掘立柱建物・柵などが多数検出された。特に右京二条三坊二町では、ほぼ中央に南北に庇が付く大規模な掘立柱建物が配置される。宮域に比較的近いという立地環境から、高位・高官の邸宅又は官衙的施設と指摘されている。

註

- 1) 加納敬二ほか『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-3、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003 年。
- 2) 百瀬正恒・網 伸也『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003 年。
- 3) 増田孝彦「長岡京跡右京第 830 次 (7ANGKT-2・GHD-9 地区)・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 117 冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、2006 年。
- 4) 山本輝男ほか「長岡京跡右京第 22・25 次調査報告書」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第 11 集、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、1997 年。
- 5) 石尾政信ほか「長岡京跡右京第 285・310・335 次発掘調査概要 (7ANIFC・GSN 地区)」『京都府遺跡調査概報』第 45 冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1991 年。
- 6) モンペティ恭代ほか『長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-4、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2006 年。
- 7) 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第 27 次遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1980-2』、京都府教育委員会、1980 年。
- 8) 山下 正「長岡京跡右京第 107 次遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』第 8 冊、京都府教育委員会、1983 年。

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

基本層序 調査地は、C区とD・E区間の農道を境にして約1mの段差があり、堆積状況が大きく異なる。

C区では、地表面から約0.6mまでが耕土・床土(第1層)で、第2層は褐色砂泥を中心とした層(厚さ0.2～0.5m、弥生時代包含層)でC1区中央から東部にかけて堆積する。第3層は褐色砂泥を中心とした層(厚さ0.8m以上、礫のレンズ状堆積を含む、無遺物層)である。

調査は第2層上面を第1面(長岡京期・長岡京期以降)、第3層上面を第2面(古墳時代・弥生時代)とし、2段階に分けて行った。第1面の検出高は西端の方が東端より約0.5m高く、西側から東に若干傾斜する。第2面も同様に東に傾斜する。調査区中央の標高は、第1面上面で35.2m、第2面上面で34.8mである。

D・E区では、地表面から約0.5mまでが耕土・床土(第1層)である。第2層は黄褐色砂泥を中心とした層(厚さ0.1～0.2m、弥生時代包含層)でD区中央から東部にかけて堆積する。第3層は黄色砂泥を中心とした層(東側で0.5m、無遺物層)である。第4層は褐色砂泥を中心とした層(東側で0.2m、縄文時代包含層)で、当区東半部のみ堆積し、東側では次第に厚くなる。第5層は褐色砂泥を中心とした層(礫のレンズ状堆積を含む、無遺物層)である。

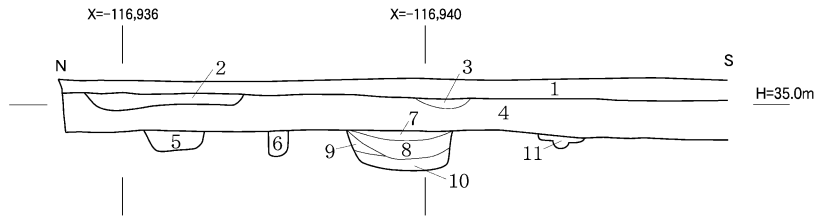
調査は、第2層上面を第1面(弥生時代・長岡京期・長岡京期以降)、第3層上面を第2面(弥生時代)、第4層上面を第3面(縄文時代)とし、3段階に分けて調査を行った。第1面の検出高は西端の方が東端より約0.2m高く、西側から東側に若干傾斜する地形である。第2面西側は調査地中央まではほぼ同一の高さであるが、中央から東に約0.6mの高低差で傾斜する。第3面は中央から東に約0.4mの高低差で傾斜する。調査区中央の標高は、第1面上面で34.8m、第2面上面は34.3m、第3面上面で34.0mである。

遺構の概要 今回の調査で検出した遺構は1,000基以上あり、時期は、縄文時代から長岡京期

表1 遺構概要表

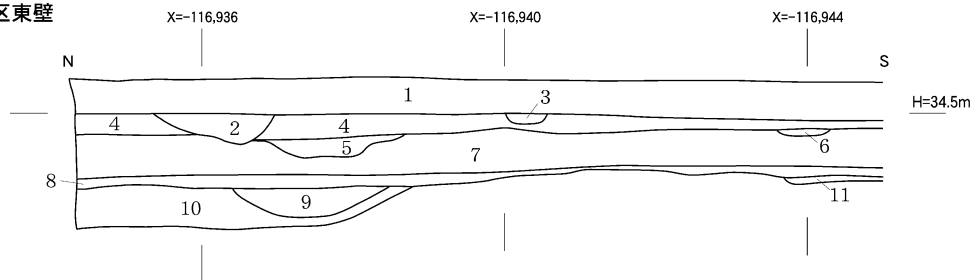
時 代	遺 構		
	C1・4区	C2・3・5区	D・E区
縄文時代			竪穴住居・土器棺墓・土壙墓・土壙・柱穴・落込み
弥生時代	土壙・柱穴	土壙・柱穴・炉	土器棺墓・土壙・柱穴・溝・炉
古墳時代	溝		
長岡京期	柵・道路・溝・土壙	掘立柱建物・道路・溝・土壙	掘立柱建物・柵・道路・築地・溝・土壙
長岡京期以降	小溝	小溝	小溝

C 3 区東壁



- | | | |
|----------------------|-------------------|------------|
| 1 耕土+床土 (第1層) | 7 灰黄褐色砂泥 | } (土壌1209) |
| 2 褐色砂泥 (溝1) | 8 黒褐色砂泥 | |
| 3 にぶい黄褐色砂泥 (溝1008) | 9 にぶい黄褐色砂泥 | |
| 4 にぶい黄褐色砂泥やや粘質 (第2層) | 10 黒褐色~灰黄褐色砂泥 | |
| 5 暗褐色砂泥 (落込み1201) | 11 褐色砂泥 (落込み1218) | |
| 6 黒褐色砂泥 (柱穴1204) | | |

D 区東壁



- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1 耕土+床土 (第1層) | 7 黄色砂泥 (第3層) |
| 2 褐色砂泥 (溝1) | 8 褐色砂泥 (第4層) |
| 3 にぶい黄褐色砂泥 (溝1008) | 9 暗褐色砂泥 (土壌3195) |
| 4 黄褐色砂泥 (第2層) | 10 黄褐色砂泥~泥砂 (落込み3254) |
| 5 黄褐色砂泥 (落込み3155) | 11 黒褐色砂泥 (竪穴住居3272) |
| 6 黄褐色泥砂 (落込み3151) | |



図6 調査区土層図 (1 : 100)

以降に及ぶ。主な遺構を時代順にみると、縄文時代の遺構は、D・E区東半分で検出し、それより西側では見られない。遺構には竪穴住居・土器棺墓・土壌墓・柱穴・土壌・落込みなどがある。

弥生時代の遺構は、C 1 区中央からD・E区にかけて検出し、それより西側では見られない。遺構には土器棺墓・土壌・柱穴・炉・溝などがある。

古墳時代の遺構は、C 1・C 2区で検出し、それより東側では見られない。遺構には溝がある。

長岡京期の遺構は、調査区全域で検出した。遺構には掘立柱建物・溝・築地・柵・道路・土壌などがある。

長岡京期以降の遺構は、調査区全域で検出した。遺構には耕作に関係する東西方向・南北方向の小溝などがある。

以下、検出遺構が多数に及ぶため、ここでは遺跡を理解する上で重要と判断した遺構をとりあげ、各時代ごとに分けて報告する。

(2) 縄文時代の遺構

竪穴住居 3175 (図版1・9、図7) D区中央部で検出した竪穴住居である。北部が一部攪乱を受ける。円形で、規模は径 4.55 m・深さ約 0.45 mである。主柱穴は7箇所、均等な間隔に位

置していない。掘形はいずれも円形で、径約 0.2 m・深さ約 0.15 m である。北西部の柱穴は建て替えにともなうと推定できる。柱穴は若干内側に傾いたものも見られる。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はやや凹凸があり、くぼんだ部分には黄灰色粘土を貼る。床面中央には地床炉がある。円形で径 0.3 m・深さ 0.07 m で、内部は堅く焼けしまり、周囲も赤く焼ける。内部には深鉢が落ち込み、かなり焼ける。

埋土は大きく 3 層に分かれる。1・2 層はにぶい黄褐色砂泥で、縄文土器・石器が多量に出土したが、3 層は黒灰色砂泥で、土器の出土量は少ない。床面で、縄文土器・石器がわずかに出土した。

竪穴住居 3223 (図版 1・10、図 8) D・E 区中央部で検出した竪穴住居である。楕円形で、規模は長辺 5.0 m・短辺 3.8 m・深さ約 0.45 m である。長軸の方位は北でやや東に振れる。支柱穴は 9 箇所確認したが、建て替えも推定できる。柱穴は、均等な間隔に位置していない。掘形はいずれも円形で、径約 0.2 m・深さ約 0.3 m である。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はほぼ平坦である。床面中央は焼けた痕跡が無く、炉は造らなかったと推定できる。

埋土はにぶい黄褐色砂泥で、縄文土器が少量出土した。

竪穴住居 200 (図版 1・10、図 9) E 区南側中央部で検出した竪穴住居である。中央部・東側・南側が攪乱を受ける。不定形と推定でき、規模は南北 5 m 以上である。深さ約 0.3 m である。支柱穴は 7 箇所確認したが、均等な間隔に位置していない。掘形はいずれも円形で、径約 0.25 m・深さ約 0.25 m である。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はやや凹凸がある。中央部が攪乱を受け、炉の存在は不明である。竪穴住居 240 と重複している。

埋土は褐色砂泥で、縄文土器が多量に出土した。

竪穴住居 240 (図版 1・10、図 9) E 区南側中央部で検出した竪穴住居である。全面的に削平

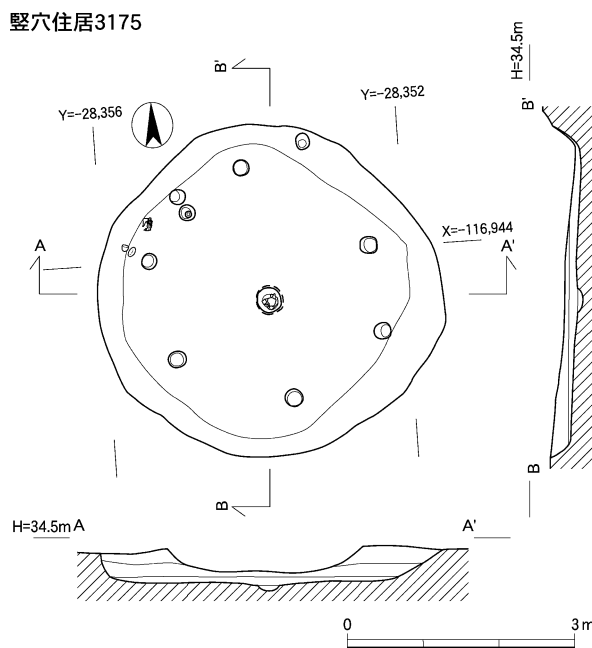


図 7 竪穴住居 3175 実測図 (1 : 100)

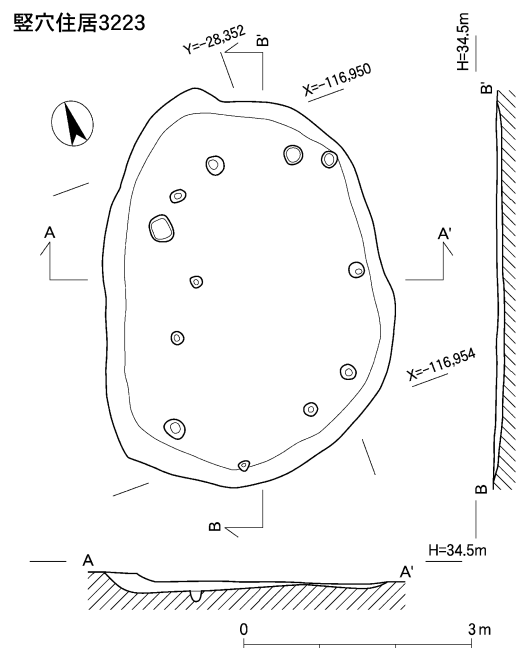


図 8 竪穴住居 3223 実測図 (1 : 100)

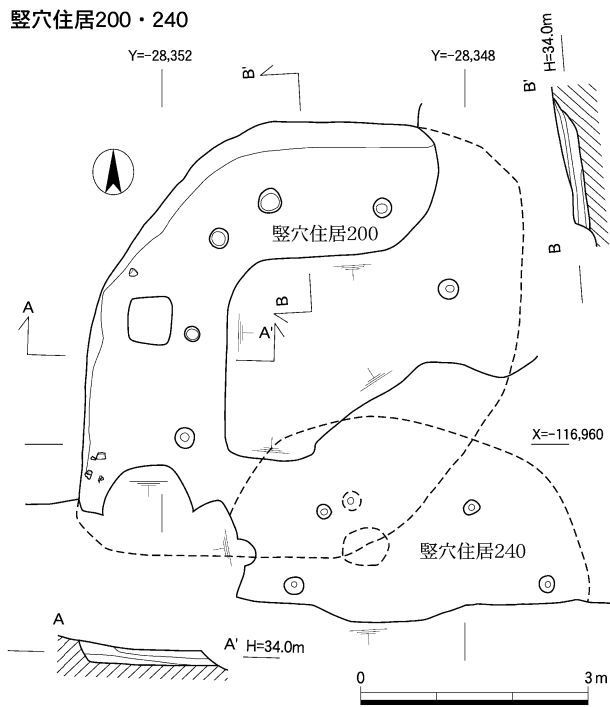


図9 竪穴住居 200・240 実測図 (1:100)

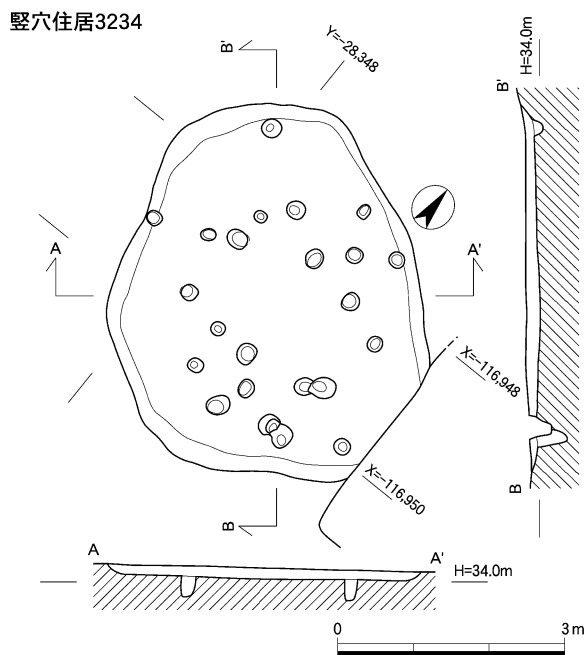


図10 竪穴住居 3234 実測図 (1:100)

を受け、中央部の焼土痕跡と柱穴を確認した。形状・規模は不明である。主柱穴は3箇所確認した。掘形はいずれも円形で、径約0.25 m・深さ約0.2 mである。竪穴住居200との前後関係は不明である。

竪穴住居 3234 (図版1・11、図10) D区南側中央部で検出した竪穴住居である。東側が攪乱を受ける。不定形で、規模は長辺4.8 m・短辺4.1 m・深さ約0.3 mである。柱穴は十数箇所確認したが、建て替えられたと推定でき、主柱穴は確定できない。掘形はいずれも円形で、径約0.2 m・深さ約0.2 mである。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はほぼ平坦である。床面中央は焼けた痕跡がなく、炉は造られなかったと推定できる。

埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器が少量出土した。

竪穴住居 3205 (図版1・11、図11) D区北東部で検出した竪穴住居である。中央部・東側が攪乱を受ける。隅丸方形で、規模は南北4.5 m・深さ約0.3 mである。主柱穴は6箇所均等な間隔に位置していない。掘形はいずれも円形で、径約0.25 m・深さ約0.15 mである。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はやや凹凸がある。中央部が攪乱を受け、炉の存在は不明である。

埋土は灰黄褐色砂泥で、縄文土器が多量に出土した。

竪穴住居 3272 (図版1・12、図12) D区東辺中央部で検出した竪穴住居である。西側を検出し、東側は調査区外に続く。円形で、規模は南北3.55 m・深さ約0.15 mである。柱穴は確認していない。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はほぼ平坦である。

埋土は黒褐色砂泥で縄文土器が少量出土した。

竪穴住居 149 (図版1・12、図13) E区南東部で検出した竪穴住居である。北西側・南西側が攪乱を受け、東側は調査区外に続く。楕円形と推定でき、長軸の方向は東西方向である。規模は

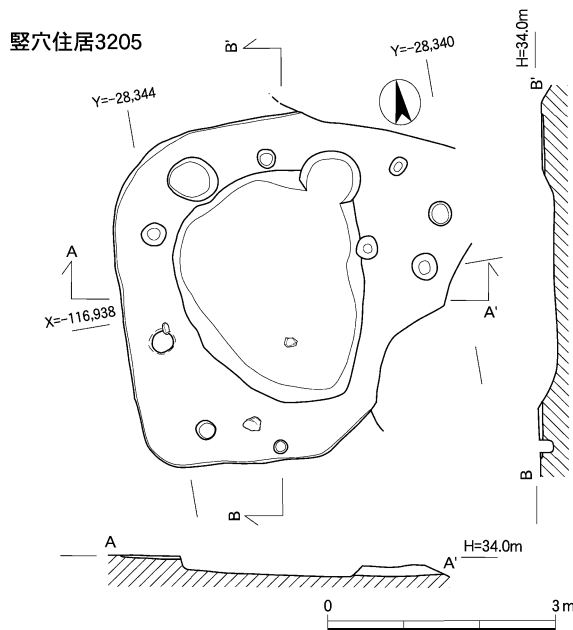


図 11 竪穴住居 3205 実測図 (1 : 100)

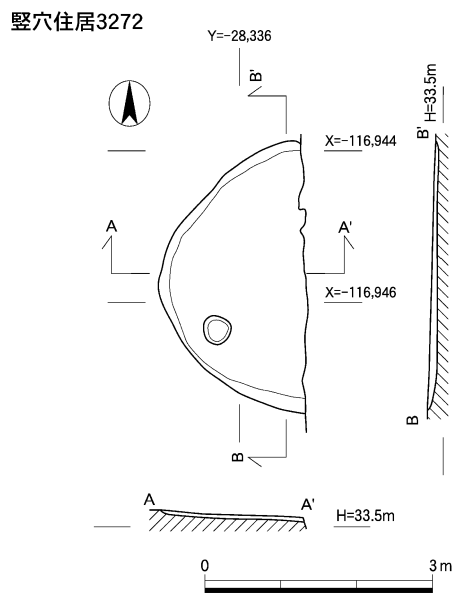


図 12 竪穴住居 3272 実測図 (1 : 100)

長辺 2.75 m 以上・短辺 2.4 m・深さ約 0.35 m である。柱穴は十数箇所確認したが、建て替えられたと推定でき、支柱穴は確定できない。掘形はいずれも円形で、径約 0.15 m・深さ約 0.2 m である。壁面はゆるやかに傾斜する。床面はほぼ平坦である。床面中央は焼けた痕跡がなく、炉は造られなかったと推定できる。

埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器が少量出土した。

土器棺墓 3164 (図版 1・14、図 14・15) D 区北東部で検出し

た土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は楕円形で、規模は長辺 0.7 m・短辺 0.55 m・深さ 0.3 m である。長軸の方向は北で東に振れる。土壌中央に鉢を据え、深鉢を蓋としてかぶせる。棺内部は暗褐色砂泥。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で、縄文土器が少量出土した。

土器棺墓 3165 (図版 1・14、図 16・17) D 区北東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は円形で、規模は径 0.55 m・深さ 0.2 m である。土壌中央に深鉢を横斜方向に据える。口縁部の方向は北方向である。底部は打ち欠く。棺内部は暗オリーブ砂泥。掘形埋土はにぶい黄褐色砂泥で、縄文土器の小片が少量出土した。

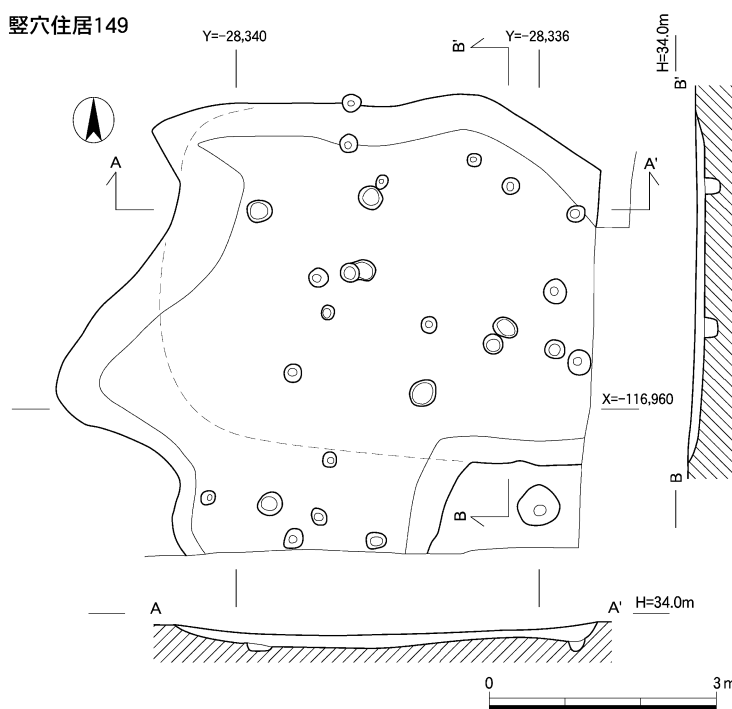


図 13 竪穴住居 149 実測図 (1 : 100)

土器棺墓3164

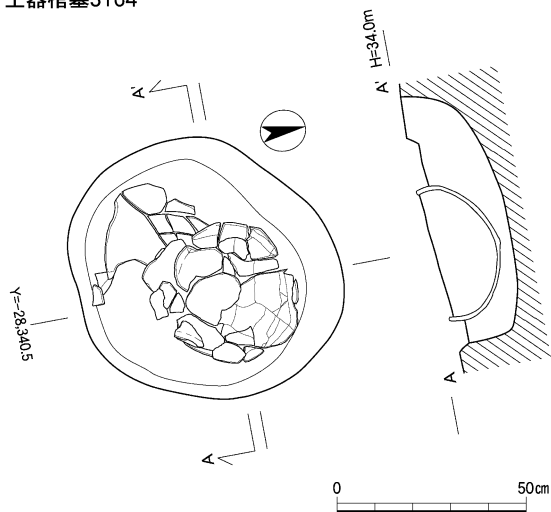


図 14 土器棺墓 3164 実測図 (1 : 20)

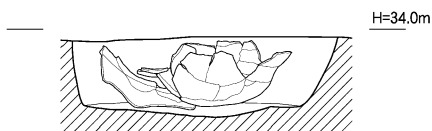


図 15 土器棺墓 3164 据置き状況図 (1 : 20)

土器棺墓3196

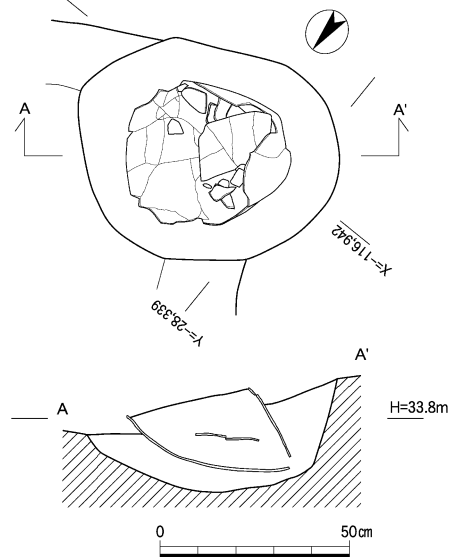


図 18 土器棺墓 3196 実測図 (1 : 20)

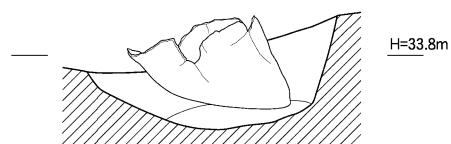


図 19 土器棺墓 3196 据置き状況図 (1 : 20)

土器棺墓3165

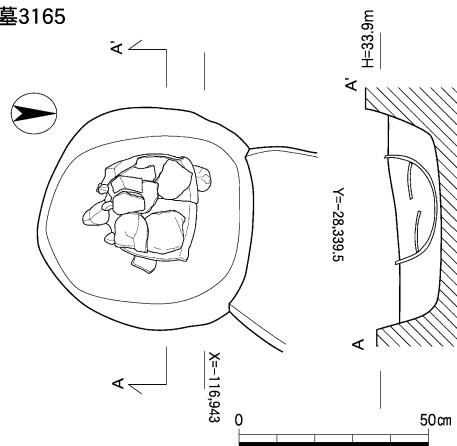


図 16 土器棺墓 3165 実測図 (1 : 20)

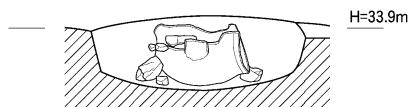


図 17 土器棺墓 3165 据置き状況図 (1 : 20)

土器棺墓3178

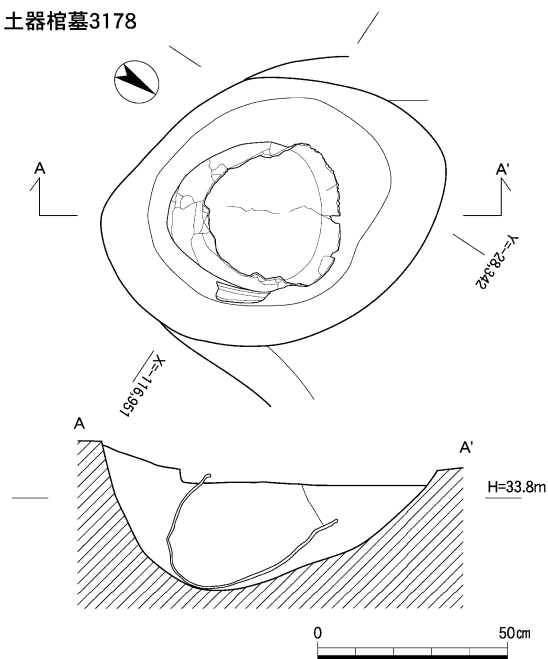


図 20 土器棺墓 3178 実測図 (1 : 20)

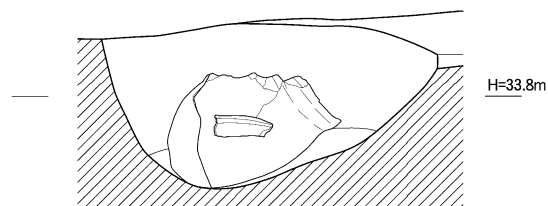


図 21 土器棺墓 3178 据置き状況図 (1 : 20)

土器棺墓 3196 (図版 1・14、図 18・19) D 区北東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は楕円形で、規模は長辺 0.7 m・短辺 0.55 m・深さ 0.3 m である。長軸の方向は北で東に振れる。土壌中央に深鉢を斜方向に据える。口縁部の方向は、北東方向である。底部は打ち欠く。棺内部は黒褐色砂泥。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で、縄文土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3143 (図版 1・14、図 22) D 区南東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は円形で、規模は径 0.5 m・深さ 0.15 m である。土壌中央に鉢を据える。棺内部は灰黄褐色砂泥。掘形埋土は黒褐色泥砂で、縄文土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3178 (図版 1・14、図 20・21) D 区南東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は楕円形で、規模は長辺 0.9 m・短辺 0.7 m・深さ 0.45 m である。長軸の方向は北で西に振れる。土壌中央に深鉢を斜方向に据える。口縁部の方向は、北西方向である。土壌内から鉢の破片が出土したことから、鉢で蓋をしたと推定できる。底部は打ち欠く。棺内部は黒褐色砂泥。掘形埋土は黒褐色泥砂で、縄文土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3159 (図版 1・14、図 23・24) - D 区南東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は円形で、規模は径 0.55 m・深さ 0.25 m である。土壌中央に深鉢を斜方向に据える。口縁部の方向はやや北西方向である。底部は打ち欠く。棺内部はにぶい黄褐色砂泥。掘形埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3253 (図版 1・15、図 25) D 区北東部で検出した土壌である。平面形は楕円形で、規模は長辺 1.15 m・短辺 0.6 m・深さ 0.3 m である。長軸の方向は北で東に振れる。底部北部に小型鉢を据える。埋土はにぶい灰黄褐色砂泥で、縄文土器の小片が少量出土した。平面形・規模および土器の副葬品があることから土器墓と推定できる。

土器棺墓3143

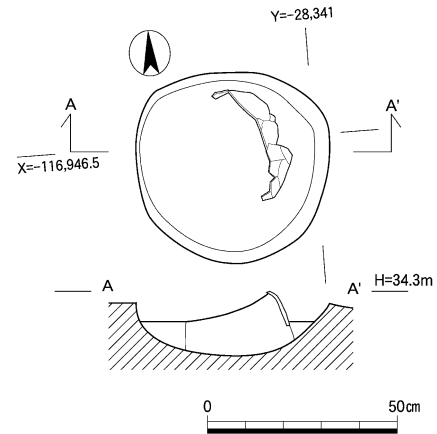


図 22 土器棺墓 3143 実測図 (1 : 20)

土器棺墓3159

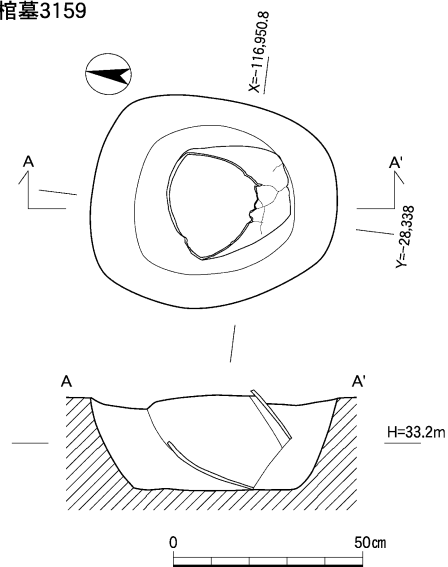


図 23 土器棺墓 3159 実測図 (1 : 20)

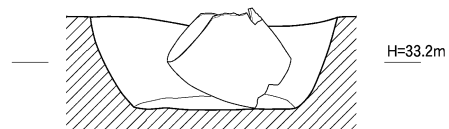


図 24 土器棺墓 3159 据置き状況図 (1 : 20)

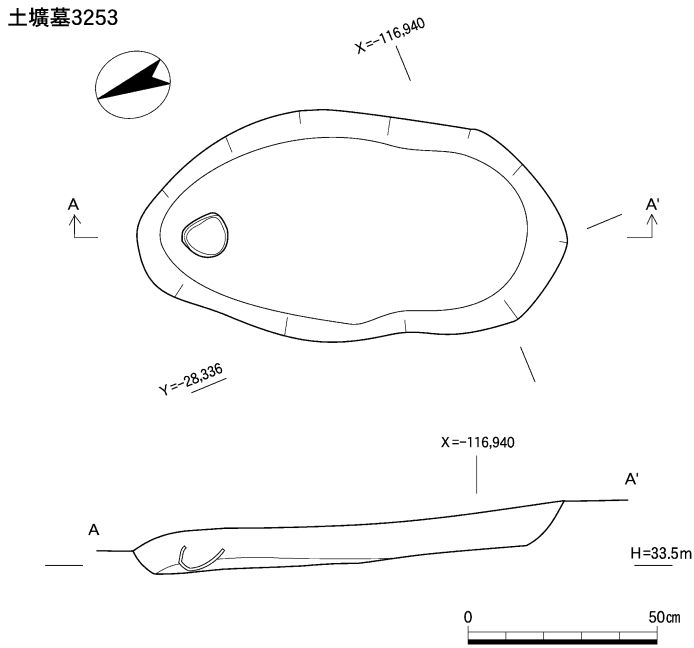


図 25 土壙墓 3253 実測図 (1 : 20)

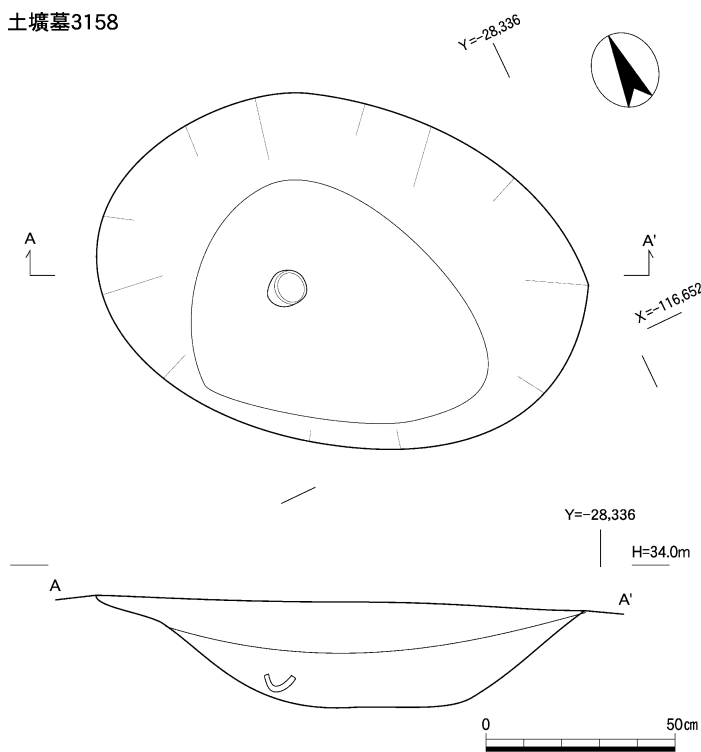


図 26 土壙墓 3158 実測図 (1 : 20)

土壙墓 3158 (図版 1・15、図 26) D区南東部で検出した土壙である。平面形は楕円形で、規模は長辺 1.3 m・短辺 0.9 m・深さ 0.27 m である。長軸の方向は北で西に振れる。底部に小型鉢を据える。埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器の小片が少量出土した。

土壙墓 166 (図版 1・15) E区南東部で検出した土壙である。平面形は楕円形で、規模は東西 1.4 m・南北 0.7 m・深さ 0.04 m である。長軸の方向は、北で西に振れる。底部で縄文土器・石器が出土した。埋土は褐色砂泥で、縄文土器の小片が少量出土した。

土壙 3156 (図版 1・15、図 27・28) D区東辺南部で検出した土壙である。西側を検出し、東は調査区外へ延びる。平面形は不明で、規模は南北約 1 m・深さ 0.55 m である。西壁ぞいに一辺約 0.2 m の石を 3 段積む。埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器の深鉢小片が少量出土した。

土壙 3195 (図版 1) D区北東部で検出した土壙で、落込み 3254 の肩部に位置し、若干削平される。東は調査区外へ延びる。平面形は不定形で、規模は東西 6.4 m 以上・

南北 4.1 m・深さ 0.74 m である。底部は凹凸がある。埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器・石器・炭を多量に包含する。土器の器形には深鉢・鉢がある。

土壙 3213 (図版 1) D区北東部で検出した土壙で、上部は土壙 3195 に削平される。平面形は不定形で、規模は東西約 4.5 m・南北約 3.5 m・深さ約 0.4 m である。底部は凹凸がある。埋土は褐色砂泥で縄文土器・石器・炭を多量に包含する。土器の器形には深鉢・鉢がある。

土壙 3282 (図版 1) D区北東部で検出した土壙で、上面は竪穴住居 3205、東側は土壙 3213・土壙 3195 に削平される。平面形は楕円形で、規模は東西 6.5 m 以上・南北約 2.7 m・深さ約 0.8 m である。底部は凹凸がある。埋土は暗褐色砂泥で、縄文土器・石器・炭を多量に包含する。土器の器形には深鉢・鉢がある。

落込み 3254 (図版 1) D区北東部で検出した落込みである。北西から南東方向に斜めに横切り、規模は幅 3.7 m 以上・深さ約 0.8 m である。南岸の傾斜はなだらかで、底部は平坦である。埋土は 3 層に分かれ、上層はにぶい黄褐色砂泥、中層は褐色砂泥、下層は黄褐色泥砂である。各層から縄文土器・炭などが出土し、特に下層からは多量に出土した。土器の器形には深鉢・鉢がある。

(3) 弥生時代の遺構

土器棺墓 3066 (図版 4・18、図 30・31) D区北西部で検出した土壙で、内部に土器棺を据える。平面形はやや楕円形で、規模は径 0.7 m・深さ 0.35 m である。上面を削平される。長軸の方向は北で東へ振れる。土壙中央に壺を斜め方向に据え、壺下半部を蓋として被せる。壺口縁部の方向は北東方向である。蓋とした壺の底部には穿孔する。棺内部は褐色砂泥。掘形埋土は暗灰黄色砂泥で、弥生土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3067 (図版 4・18、図 29) D区北西部で検出した土壙で、

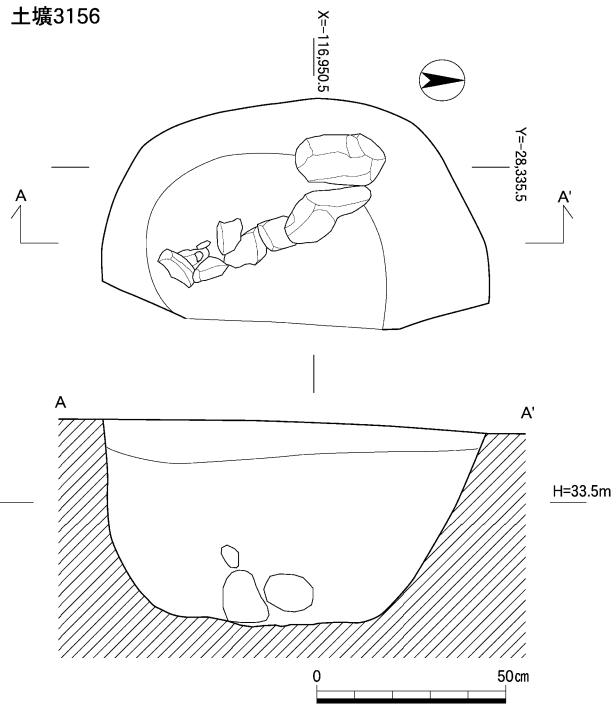


図 27 土壙 3156 実測図 (1:20)

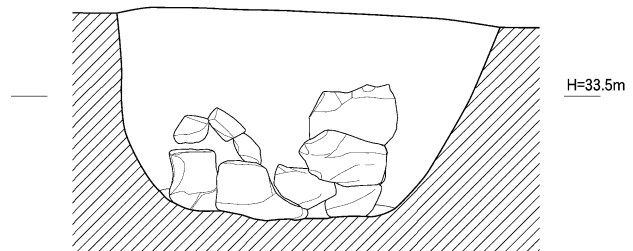


図 28 土壙 3156 石積み状況図 (1:20)

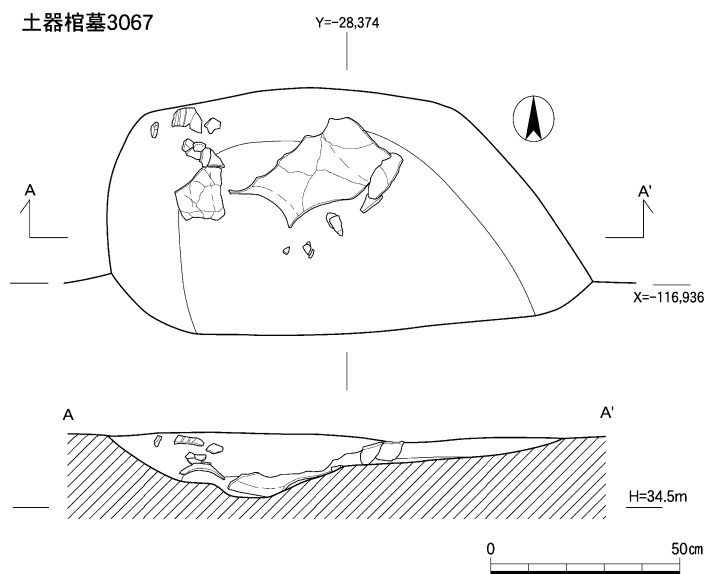


図 29 土器棺墓 3067 実測図 (1:20)

土器棺墓3066

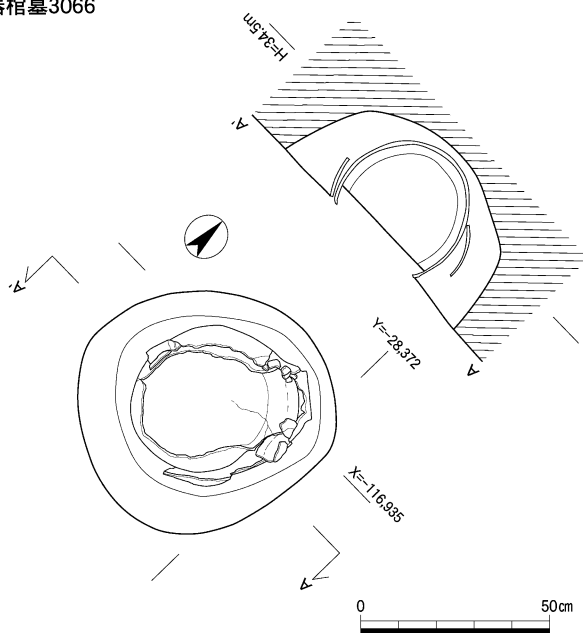


図 30 土器棺墓 3066 実測図 (1 : 20)

土器棺墓3153

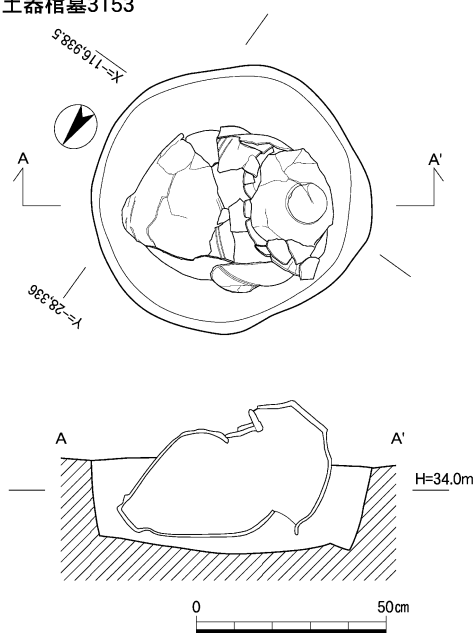


図 32 土器棺墓 3153 実測図 (1 : 20)

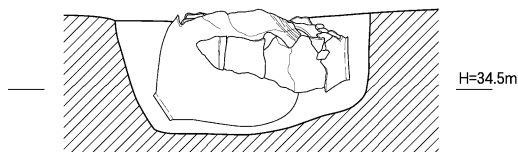


図 31 土器棺墓 3066 据置き状況図 (1 : 20)

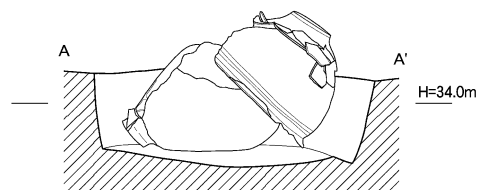


図 33 土器棺墓 3153 据置き状況図 (1 :

内部に土器棺を据える。平面形は楕円形で、規模は東西約 1.2 m・深さ 0.15 m で、南側が攪乱を受ける。長軸の方向は東西方向である。土壌中央に壺を据えつけ、胴部しか残存していない。掘形埋土は褐色砂泥で、弥生土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3153 (図版 4・18、図 32・33) D 区北東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は円形で、規模は径 0.7 m・深さ 0.2 m で、上面を 0.2 m 以上削平される。土壌中央に壺を斜方向に据え、鉢を蓋として被せる。壺口縁部の方向は、南西方向である。棺内部は暗褐色砂泥。掘形埋土は灰黄褐色砂泥で、弥生土器の小片が少量出土した。

土器棺墓 3138 (図版 4・18、図 34・35) D 区北東部で検出した土壌で、内部に土器棺を据える。平面形は楕円形で、規模は東西 0.6 m・南北 0.8 m・深さ 0.25 m である。長軸の方向は南北方向である。土壌中央に土器棺を斜方向に据え、削出突帯をもつ壺の下半部を蓋として被せる。土器棺の口縁部の方向は北方向である。棺内部は灰黄褐色砂泥。掘形埋土は褐色砂泥で、弥生土器の小片が少量出土した。

土壌 1209 (図版 3・19、図 36) C 3 区北東部で検出した土壌である。平面形は楕円形で、西部を検出し、東側は調査区外に続く。規模は南北 1.6 m・東西 1.4 m 以上・深さ 0.8 m である。埋土は 3 層に分かれ、上層は灰黄褐色砂泥、中層は黒褐色砂泥で炭・焼土を多く含み、下層は黒

土器棺墓3138

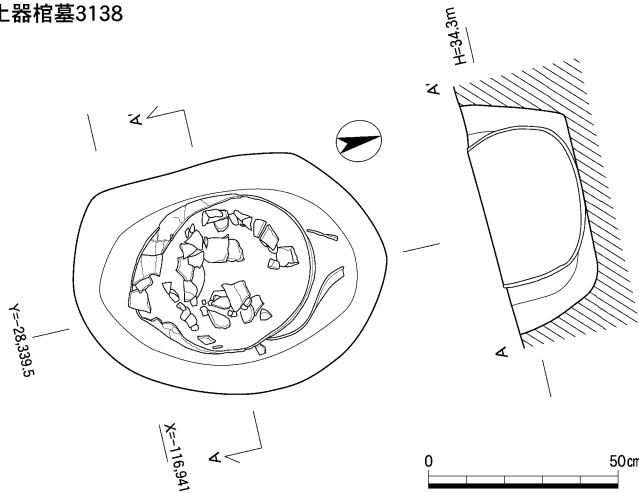


図34 土器棺墓 3138 実測図 (1 : 20)

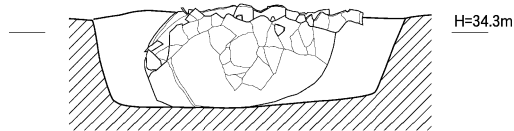


図35 土器棺墓 3138 据置き状況図 (1 : 20)

土壌1209

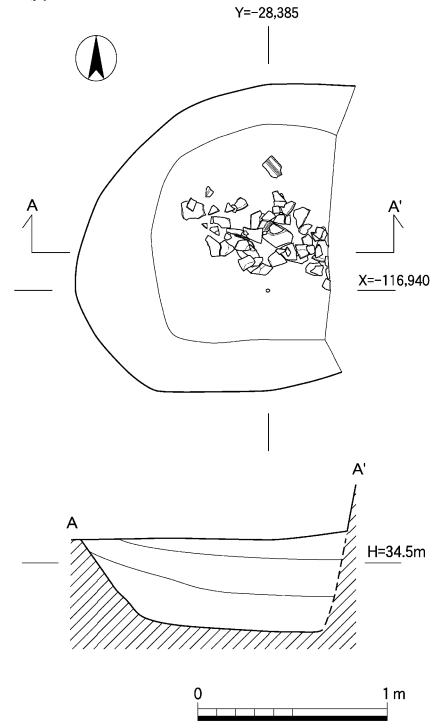


図36 土壌 1209 実測図 (1 : 40)

褐色泥砂で炭・焼土を含む。中層・下層から弥生土器・石器が多量に出土したが、上層は小片が少量出土したのみである。土器の器形には甕・壺・鉢などがある。石器には石鏃・剥片などがある。

土壌 1507(図版3) C 3区北西部で検出した土壌である。平面形は楕円形で、規模は長辺 1.4 m・短辺 0.7 m・深さ 0.24 mである。底部は平坦で南側が一段上がる。長軸の方向は北でやや東に振れる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、弥生土器の小片が少量出土した。

土壌 1493(図版3) C 3区南西部で検出した土壌である。平面形は長方形で、規模は長辺 1.83 m・短辺 0.72 m・深さ 0.1 mである。底部は平坦である。長軸の方向は北で東に振れる。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含み、弥生土器の小片が少量出土した。土器の器形には甕などがある。

土壌 1490(図版3・19) C 3区南西部で検出した土壌である。平面形は長方形で、規模は長辺 1.42 m・短辺 0.9 m・深さ約 0.9 ~ 1.1 mである。底部は凹凸がある。長軸の方向は北で西に振れる。埋土は暗灰黄色砂泥で炭を含み、弥生土器の小片が多数出土した。土器の器形には壺・甕などがある。

土壌 1322(図版3) C 3区中央北部で検出した土壌である。平面形は長方形で、規模は長辺 2.6 m・短辺 1.4 m・深さ約 0.25 mである。底部は平坦である。長軸の方向は北で東に振れる。埋土は暗灰黄色砂泥で、炭・焼土を含み、弥生土器小片が少量出土した。

土壌 1358(図版3) C 3区中央南部で検出した土壌である。平面形は長方形で、規模は長辺 0.75 m・短辺 0.67 m・深さ約 0.18 mである。底部は平坦である。長軸の方向は北で西に振れる。埋土は灰黄褐色砂泥で、炭・焼土を含み、弥生土器の小片が少量出土した。

土壌 1292(図版3) C 3区南東部で検出した土壌である。平面形は不定形で、規模は長辺 1.7

m・短辺 1.2 m・深さ約 0.3 mである。底部は平坦である。埋土はオリーブ褐色砂泥で、炭を含み、弥生土器の小片が少量出土した。土器の器形には甕などがある。

土壙 1258 (図版 3・19) C 3 区南東部で検出した土壙である。平面形は楕円形で、規模は長辺 1.42 m・短辺 0.95 m・深さ約 0.3 mである。底部は平坦である。長軸の方向はほぼ北を向く。埋土は黒褐色砂泥で、炭を含み、弥生土器の小片が少量出土した。土器の器形には壺・甕・鉢などがある。

溝 3172 (図版 4) D 区北辺中央部で検出した溝である。南東から北西に湾曲しながら約 18 m 延び、北側は調査区外になる。規模は幅 0.3～0.7 m・深さ約 0.3～0.05 mで、断面はU字形で底部には凹凸がある。底部標高は、北端では 34.2 m、南端では 34.34 mで、北側に向かい次第に深くなる。埋土は褐灰色砂泥で、弥生土器の小片が少量出土した。

柱穴群・炉 (図版 3・4・16) 上記の遺構以外に、弥生時代に属すると考えられる柱穴を調査区全域で検出した。柱穴の分布は、大きく分けて、C 1 区北東部から C 2 区北西部、C 3 区、C 5 区東側から D・E 区西側、D・E 区北東部に集中する傾向がある。掘形は、径 0.1～0.3 mで、深さは浅いものから深いものまで一定していない。柱穴は住居に関連する柱穴などと推定できるが、上部が削平を受け、関連遺構も未検出なため、建物としてまとまらない。

また、C 3 区の柱穴群の中、D・E 区北端、D・E 区中央では、炉と明確に判断できる遺構を数基、C 3 区の柱穴群の中では地面が火を受けた痕跡を数箇所検出した。これらについても関連した遺構が確認できないため、住居内のものか住居外のものか不明である。また、焼土面は上部が大きく削平を受けたと推定でき、地面が火を受けて焼けた状態としてしか認められない。

土壙群 (図版 4・17) D・E 区南東部で土壙群を集中して検出した。形状は不定形で、深さも一定していない。埋土は黄灰色砂泥が中心で、弥生土器の小片が少量出土した。

(4) 古墳時代の遺構

溝 131 (図版 2・3) C 1・C 4 区南東部から C 2 区南西部・C 5 区西部で検出した溝である。C 1 区から C 2 区で大きく湾曲し、両端は調査区外に延びる。規模は、幅約 1.3～4.0 m・深さ約 0.3 mで、断面はU字形で底部には凹凸があり、東部には特に深い箇所もある。底部標高は、西端では 34.9 m、湾曲部では 35.0 m、南端では 34.4 mである。埋土は場所によってかなり異なるが、大きく 3 層に分かれる。上層は黄灰色砂泥、中層は褐灰色泥砂、下層は礫を含む黄褐色泥砂である。埋土からは土師器・須恵器が少量出土した。土師器の器形には甕、須恵器の器形には杯身・甕がある。

溝 135 (図版 2) C 4 区西辺で検出した流路である。R 850 調査 B・C 区で検出した弧状溝 2056 の南東部にあたる。埋土は場所によって異なるが、オリーブ褐色砂泥層が中心である。下層は礫を含む。土師器・須恵器が少量出土した。

(5) 長岡京期の遺構

掘立柱建物 1060 (図版6・21・23、図37) C3区中央部で検出した掘立柱建物である。東西5間(10.15m)・南北2間(4.45m)の東西棟である。桁行方向の柱間は西から2.0m・1.95m・2.25m・2.0m・1.95m、梁間方向の柱間は北から2.25m・2.2mである。身舎の柱穴掘形は方形で、規模は一辺約0.7m・深さ0.6~0.9mである。身舎内部床面の北寄りには、播鉢状に凹む円形土壇が、東西6列、南北2列にやや不規則に並ぶ。土壇規模は、径0.3~0.7m・深さ0.08~0.2mである。R850調査検出の掘立柱建物1139と同様に裏据付け跡と考えられる。北桁行柱筋は溝1南肩から南へ7.7mに位置する。身舎北桁行柱筋は建物3003・建物3057北桁行柱筋にほぼ揃う。身舎西妻柱筋は建物1646西妻から2列目柱穴に揃い、東妻柱筋は建物1646東妻柱筋に揃う。柱穴掘形から土師器・須恵器が少量出土した。掘形埋土は黄灰色砂泥~暗灰色砂泥である。以下も同様である。

掘立柱建物 1646 (図版6・20、図38) C3区南東辺・C5区東部で検出した掘立柱建物である。東西5間(11.97m)で、南北は2間(4.7m)と推定できる東西棟である。桁行方向の柱間は西から2.44m・2.4m・2.42m・2.3m・2.41mである。身舎の柱穴掘形は方形または楕円形で、規模は一辺約0.7m・深さ0.35~0.55mである。柱穴掘形・柱あたりから土師器・須恵器が少量出土した。

掘立柱建物 3003 (図版7・22、図39) D区西辺中央部で検出した掘立柱建物である。南北2

掘立柱建物1060

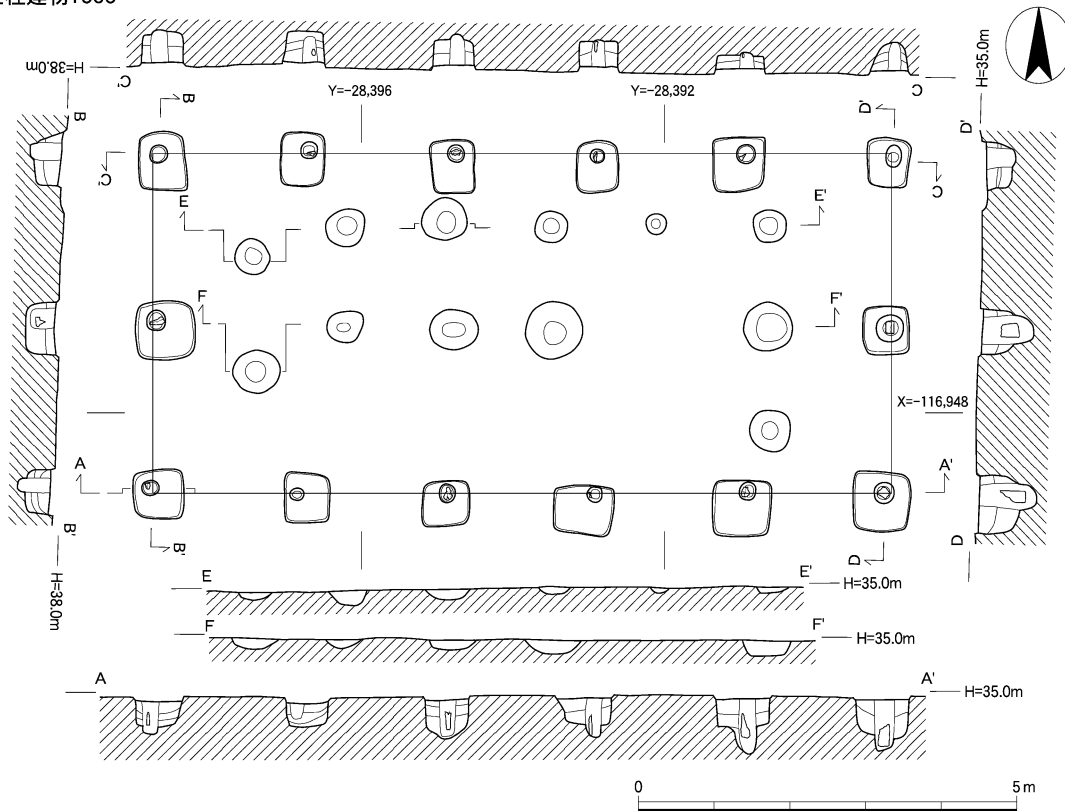


図37 掘立柱建物 1060 実測図 (1:100)

掘立柱建物1646

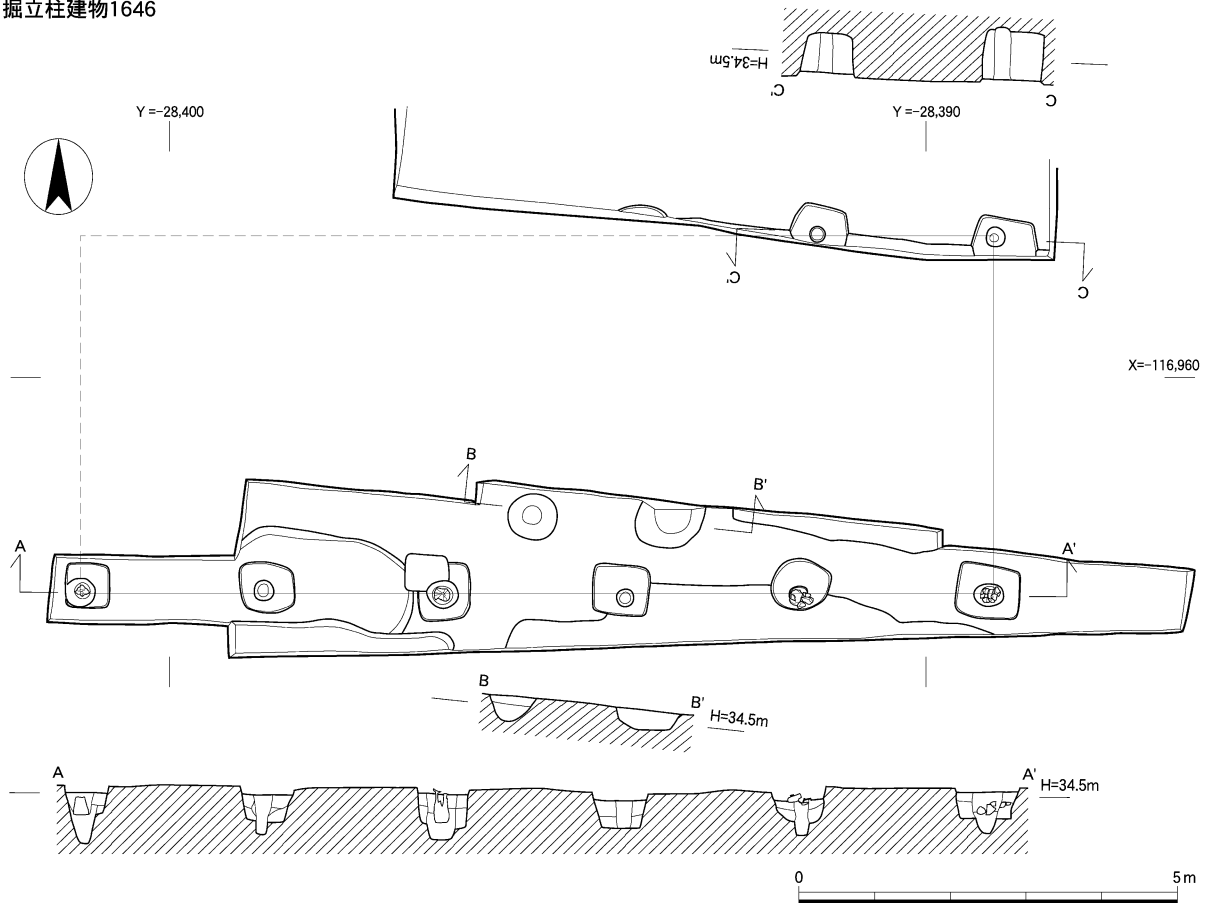


図 38 掘立柱建物 1646 実測図 (1 : 100)

間 (4.8 m) で、東西 3 間 (7.3 m) 分検出した東西棟で西側は調査区外に続く。桁行方向の柱間は東から 2.4 m・2.4 m・2.5 m、梁間方向の柱間は 2.4 m 等間である。庇は南へ 2.9 m、東へ約 2.1 m 出る。身舎の柱穴掘形は方形で、規模は一辺約 0.7 m・深さ約 0.2 m である。庇の柱穴掘形は方形で、規模は径 0.5 m・深さ 0.15 m と小さい。身舎北桁行柱筋は溝 1 南肩から南へ 7.2 m に位置する。身舎北・南、庇桁行柱筋は建物 3057 と揃う。柱穴掘形・柱あたりなどから土師器・須恵器が少量出土した。

掘立柱建物 3057 (図版 7・22、図 40) D 区中央部で検出した掘立柱建物である。東西 5 間 (12 m)・南北 2 間 (4.7 m) の東西棟である。身舎桁行方向の柱間は東から 2.4 m・2.45 m・2.3 m・2.4 m・2.45 m、梁間方向の柱間は北から 2.3 m・2.4 m である。庇は南へ 2.85 m、西へ約 1.8 m、東へ約 1.4 m 出る。身舎の柱穴掘形は方形で、規模は一辺約 0.7 m・深さ約 0.2 m である。庇の柱穴掘形は方形または円形で、規模は一辺 0.4 m・深さ 0.1 ~ 0.2 m と小さい。北桁行柱筋は溝 1 南肩から南へ 7.3 m に位置する。身舎東・西妻柱筋は建物 9 東西妻柱筋に揃う。身舎西妻柱筋が九町の東西中心のラインにほぼあたる。柱穴掘形・柱あたりなどから土師器・須恵器が少量出土した。

掘立柱建物 9 (図版 7・23、図 41) E 区南辺中央部で検出した掘立柱建物である。東西 5 間 (12.0 m)・南北 2 間 (5.0 m) の東西棟である。身舎桁行方向の柱間は 2.4 m 等間で、梁間方向の柱間は 2.4 m 等間である。庇は北へ約 1.4 m 出る。身舎の柱穴掘形は方形で、規模は一辺約 0.6 m・深さ約 0.2

掘立柱建物3003

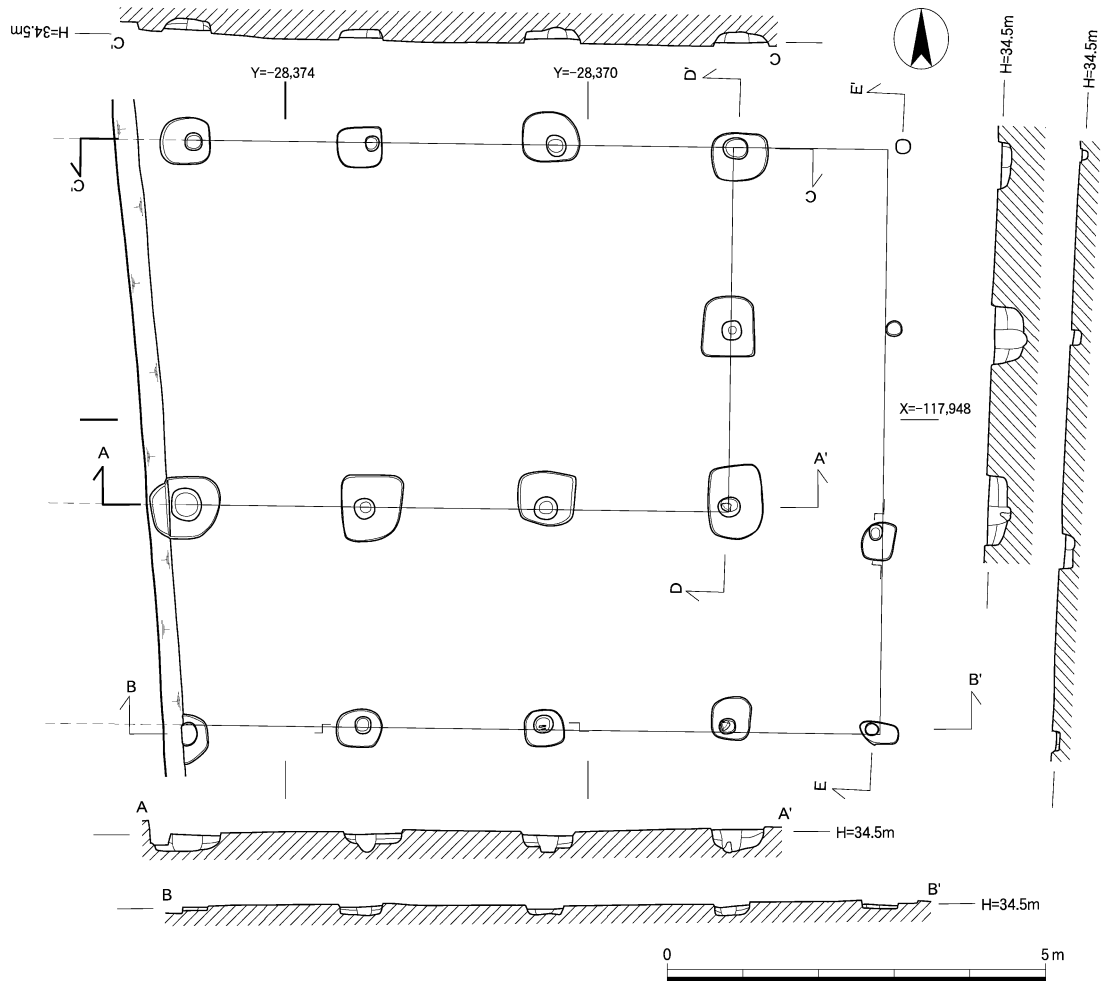


図 39 掘立柱建物 3003 実測図 (1 : 100)

mである。底の柱穴掘形は円形または方形で、規模は径約0.3m・深さ約0.2mと小さい。柱穴掘形・柱あたりなどから土師器・須恵器が少量出土した。

柵 68 (図版 5・24) C 1 区北部中央で検出した東西方向の柵列で、溝 1 の南肩から南へ 5.7 m に位置する。検出長は 6.7 m である。柱間寸法は 2.0 ~ 2.4 m である。柱穴掘形は円形で、規模は径約 0.3 m・深さ 0.1 ~ 0.15 m である。A 2 区にある柱穴 121 も同一ライン上にある。柱穴掘形から土師器・須恵器が少量出土した。

柵 25 (図版 5) C 1 区中央部で検出した東西方向の柵列で、溝 1 南肩から南へ 10.7 m に位置する。検出長は 5.7 m である。柱間寸法は 1.2 ~ 1.5 m である。柱穴掘形は楕円形で、規模は一辺 0.35 ~ 0.65 m・深さ 0.1 ~ 0.15 m である。C 2 区建物 1060 南桁柱筋とほぼ同一ライン上にある。柱穴掘形から土師器・須恵器が少量出土した。

柵 3087 (図版 7・24) D 区中央北西部で検出した東西方向の柵列で、溝 1 南肩から南へ 3.6 m に位置する。溝 1008 が埋まった後に造られる。検出長は 5.0 m である。柱間寸法は 2.5 m 等間である。柱穴掘形は方形または楕円形で、規模は一辺 0.5 ~ 0.6 m・深さ約 0.3 m である。柱穴掘形から土師器・須恵器が少量出土した。

掘立柱建物3057

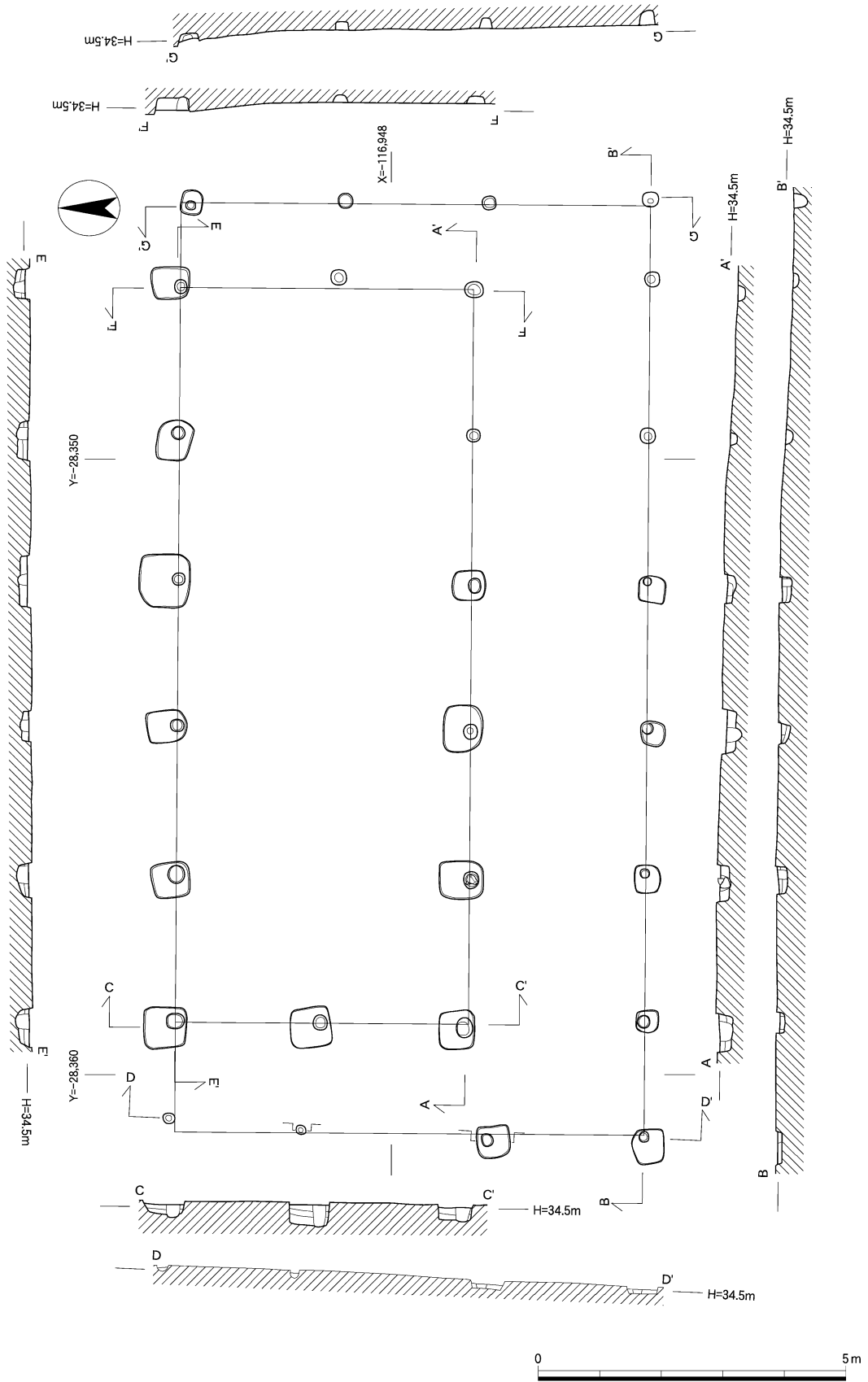


图 40 掘立柱建物 3057 实测图 (1 : 100)

掘立柱建物9

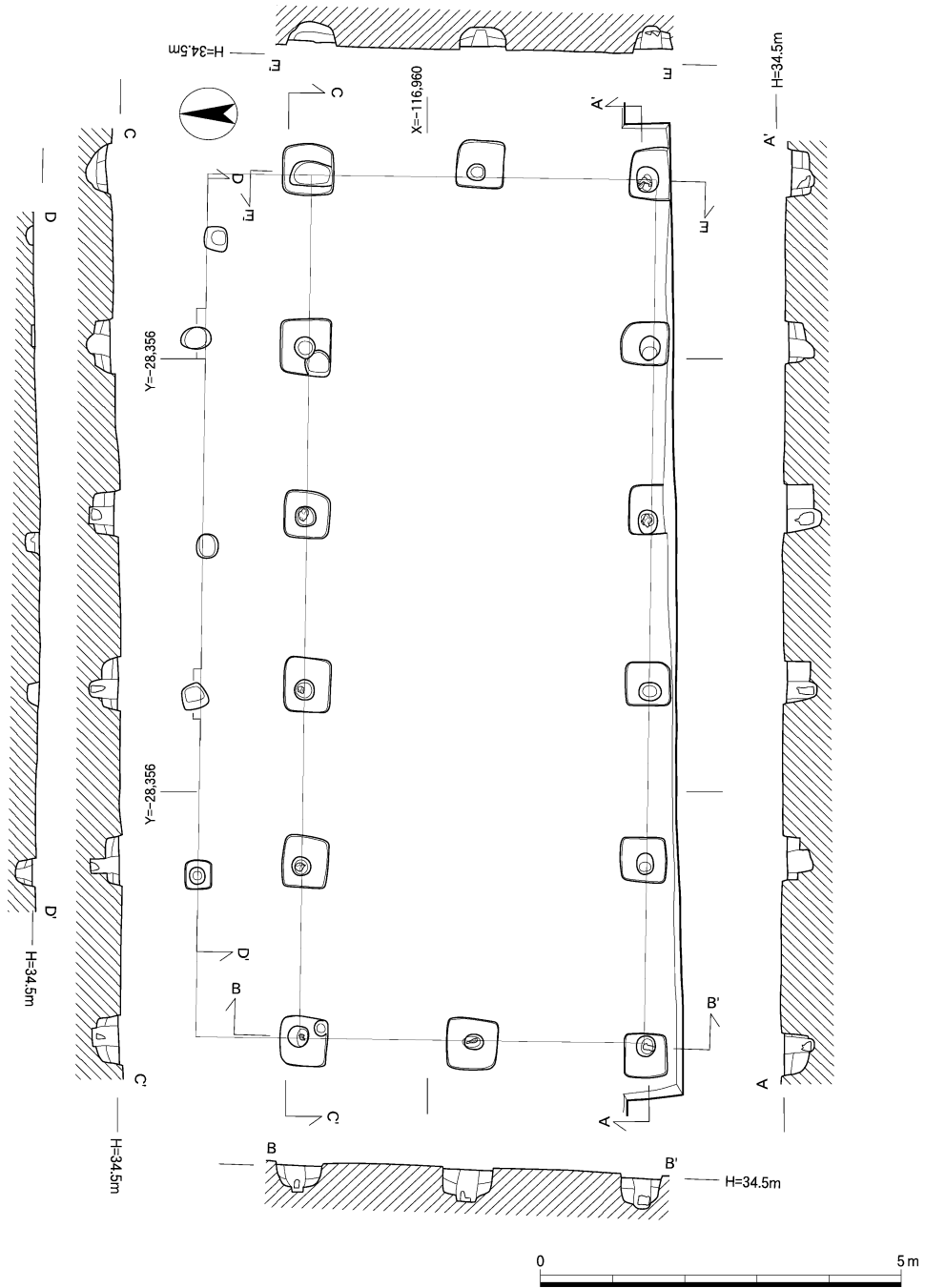


図41 掘立柱建物9実測図(1:100)

溝1(図版5・7・20・25・26)C区からD区北辺で検出した東西方向の溝である。東西はそれぞれ調査区外へ延びる。規模は幅約1.2~1.8m、深さ0.2~0.3mで、C区中央部、D区東部で幅がやや広がる。両肩は若干凹凸があるが、ほぼ直線的である。断面はU字形であるが、底部には凹凸がある。C1区・C2区間の西三坊坊間小路との交差点部分でも途切れない。方位は東で北へ0度4分40秒振れる。北肩はC区では調査区外となるためほとんど検出できなかったが、D区では北肩および一条大路路面を検出した。底部の標高はC1区西端で35.47m、D区東端では34.07mで東側に傾斜する。埋土は褐色砂泥で、土師器・須恵器が少量、平瓦・丸瓦の小片が

少量出土した。土師器の器形には椀A・皿A・杯A・甕、須恵器の器形には杯A・B・杯蓋・鉢D・壺蓋・壺・甕がある。R 850 調査溝4と同一の溝である。

なお、一条大路路面は削平を受け、舗装などは確認できなかった。

溝1008（図版6・7・25～27） C3区からD・E区北辺で検出した東西方向の溝である。溝1と平行する。西はC3区西端で途切れ、東は調査区外へ延びる。規模は幅約0.8～1.5m、深さ約0.14mで一定しておらず、D・E区西部では幅がやや広くなる。断面はU字形であるが、底部はかなり凹凸がある。底部の標高はC3区西端で35.1m、D区東端で34.35mで、溝1と同様に東側に傾斜する。埋土は褐色砂泥で、土師器・須恵器が多量に出土したほか、平瓦・丸瓦の小片が少量出土した。土師器の器形には椀A・皿A・杯A・B・甕、須恵器の器形には杯A・杯B・杯蓋・鉢・壺G・小壺・甕などがある。溝1との心々間距離は4～4.5mで、溝1南肩と溝1008北肩の幅は2.9～3.4mである。R 850 調査溝1020と同様の溝である。

溝42（図版5・25・26） C1区東辺で検出した南北方向の溝である。北端は溝1に接続する。規模は幅約0.8m・深さ約0.1mである。断面はU字形であるが、底部には凹凸がある。溝1南肩から南へ13.5mの地点で途切れる。埋土は褐色砂泥で、土師器・須恵器が少量出土した。

溝1049（図版6・25・26） C2区西辺で検出した南北方向の溝である。北端は溝1に接続する。規模は幅0.5～0.9m・深さ0.12～0.07mである。断面はU字形であるが、底部には凹凸がある。溝1南肩から南へ18.2mの地点で途切れる。埋土は暗褐色砂泥で、土師器・須恵器が少量出土した。溝42と溝1049の心々距離は8.4mである。

柱穴列1002（図版6・25） C3区北辺で、調査区東端から22.5mまでの間、溝1と溝1008の間で検出した2条の東西方向の柵列である。北側柱列は溝1南肩から、南に0.5～1.1mに位置する。検出長は17.5mである。北側柱列と南側柱列の間隔は1.1～1.8mで東側がややすぼまる。柱穴は方形で、規模は一辺約0.3m、深さ約1.2mで、柱あたりの断面は若干内傾する。北側・南側柱列は4対並び、東西間隔は西から5.95m・6.0m・5.5mと一定していない。東側2対は造り替えが認められる。柱穴埋土から土師器・須恵器が少量出土した。R 850 調査の柱穴列2011と同様の施設である。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査ではC区、D・E区併せて、整理箱に137箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・木製品・石器などの種類がある。大半は土器類が占め、その他はごくわずかである。縄文時代の遺物が大半を占め、弥生時代の遺物が続き、他の時期の遺物は少ない。

縄文時代の遺物には、縄文土器・石器などがある。包含層・住居の埋土・落込みなどからまともに出て出土した。土器の器形は鉢が大半を占める。時期は縄文時代晩期中頃（滋賀里Ⅱ・Ⅲ）が中心である。石器には石斧・石鏃・石棒・石刀・石剣・石皿・凹石・磨石・敲石などがある。また、剥片が多数出土したほか、石核・未製品などがみられる。

弥生時代の遺物には、弥生土器などがある。包含層・土壌などから出土した。土器の器形には壺・甕・蓋などがある。時期は弥生時代前期後半（畿内第Ⅰ様式中段階～新段階）である。

古墳時代の遺物には、土師器・須恵器がある。溝や後世の遺構から小片が少量出土した。土師器の器形には甕、須恵器の器形には杯身・甕などがある。

長岡京期の遺物には、土器類・瓦類がある。溝・柱穴などから出土した。土師器の器形には皿・椀・杯・甕があり、須恵器の器形には皿・杯・蓋・壺・鉢などがある。瓦類は軒丸瓦1点のほか、丸瓦・平瓦が少量出土した。土製品・木製品も少量出土した。

長岡京期以降の遺物には、土師器・瓦器・銭貨などがある。小溝などから少量出土した。

今回の報告では、土師器とある程度まともに出て出土した遺物を図示する程度にとどめ、その他の遺物は写真のみの掲載とした。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器82点	53箱	3箱
	石器		石器53点	17箱	0箱
弥生時代	弥生土器		弥生土器37点	30箱	3箱
古墳時代	土師器、須恵器			少量	少量
長岡京期	土師器、須恵器、土製品		土師器10点、須恵器16点	24箱	3箱
	瓦		軒丸瓦1点	少量	少量
	木製品		柱4点	5箱	0箱
長岡京期以降	土師器、瓦器、銭貨			少量	少量
合 計		169箱	203点 (31箱)	129箱	9箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より32箱多くなっている。

(2) 縄文時代の遺物

1) 土器類 (1～83) (図版 28～31、図 42～44)

土器は、竪穴住居 3175・3205 埋土や土器棺墓 3164・3165 をはじめ、土壙墓 3158、包含層などから出土した。器形は鉢などがある。

鉢形土器 深鉢と浅鉢、小型の鉢がある。

深鉢 (1・2・4～6・8 など) 深鉢は、底部中央部分が若干凹んだ凹底のもの、尖底のものがある。体部は湾曲して上方に伸びる砲弾形で、5 は口縁部がやや内弯しながら立ち上がり、端部を収める。1・4・6 は口縁部が外反し頸部がくびれる。2 は小さな波状口縁をもち、8 は口縁端部に刻目を施す。

成形は、粘土紐を積み上げて行う。口縁部内外面は基本的にヨコナデで、横方向の二枚貝条痕を施すものもある。体部は二枚貝条痕を施すものや、ケズリ調整を施すものがある。内面はオサエの後ナデを施す。

口径約 35～40 cm・高さ約 35～40 cm 前後のもの、口径約 25 cm・高さ約 30 cm 前後のものがある。

浅鉢 (3・7・28・29・40・75・77 など) 浅鉢は、凹む平底を呈す。体部は外上方に広がり、7 は胴部が強く屈曲して口縁部が短く外反し、端部が内側に肥厚する、または丸く収める。3 は胴部が湾曲し立ち上がり、口縁部が外反する。口縁部片には波状口縁のものや口縁端部に装飾を付けるものもある。

体部内外面はミガキを施すが、磨滅したものが多く、肩部に文様を施すものがあり、74 は2条の沈線の間突帯を貼り付け、さらに爪形文を施す。また、口縁部外面に文様を施すものも少量みられ、沈線による区画文 (28)、磨消縄文 (75)、刺突文 (77)、突帯を貼り付けるもの (29) などがみられる。器壁に赤色顔料を塗布した土器 (40) が出土した。

口径約 30 cm・高さ約 22 cm 前後のもの、口径約 27 cm・高さ約 15 cm 前後のものがある。

小型鉢 (9・10) 9 は底部中央部分が若干凹み、胴部は外上方に広がり、口縁部がやや内弯する。10 は底部が丸底気味で、胴部は外上方に広がる。器壁は磨滅して調整は不明である。

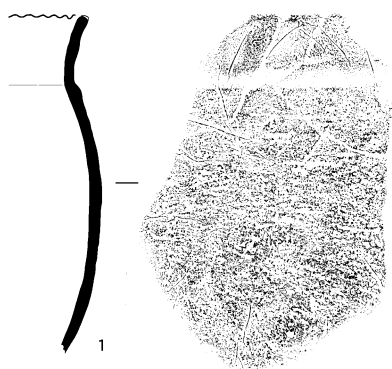
注口土器 (41・53) 注口部が2点出土している。

1 は竪穴住居 3175 の炉内、11 は竪穴住居 3175 の床直上、12～24 は竪穴住居 3175 埋土、2・3 は土器棺墓 3164、4 は土器棺墓 3165、5 は土器棺墓 3159、6 は土器棺墓 3196、7・8 は土器棺墓 3178、9 は土壙墓 3253、10 は土壙墓 3158、25～31 は竪穴住居 200 埋土、32～37 は土壙 3195 埋土、45～56 は土壙 3213 埋土、57～68 は土壙 3282 埋土、69～82 は落込み 3254 下層から出土した。その他の縄文土器は、各遺構や包含層から出土した。

2) 石器 (83～135) (図版 32、図 45・46)

石器は、竪穴住居や土壙などの遺構や包含層から出土し、器種が豊富である。また、未製品や

竖穴住居3175



土器棺墓3164

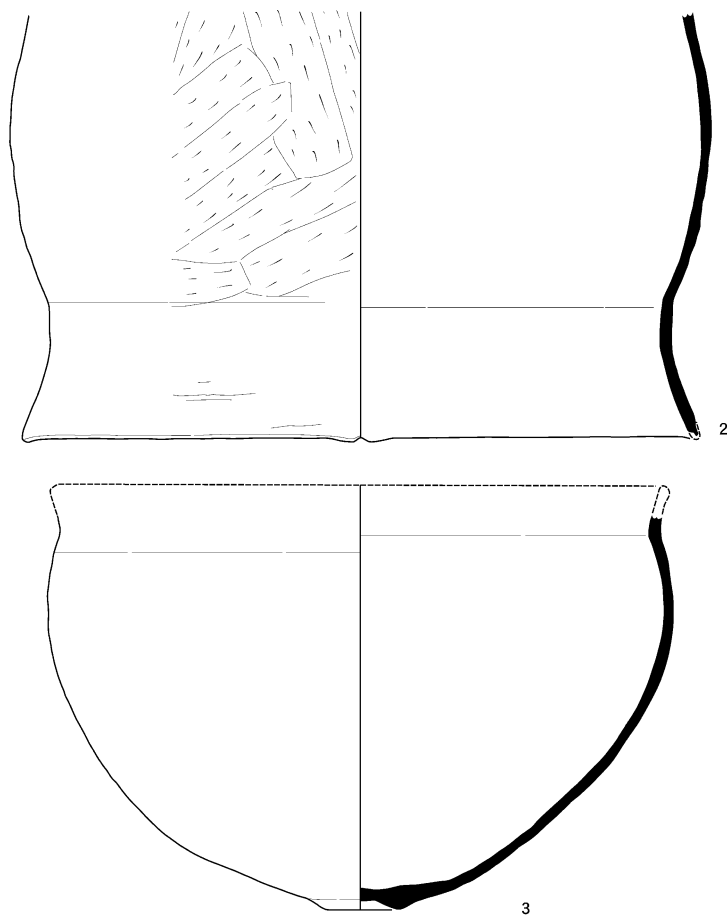
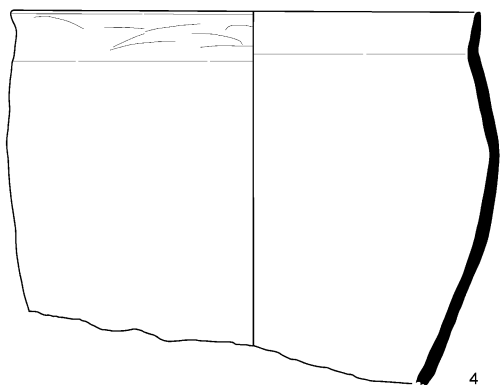
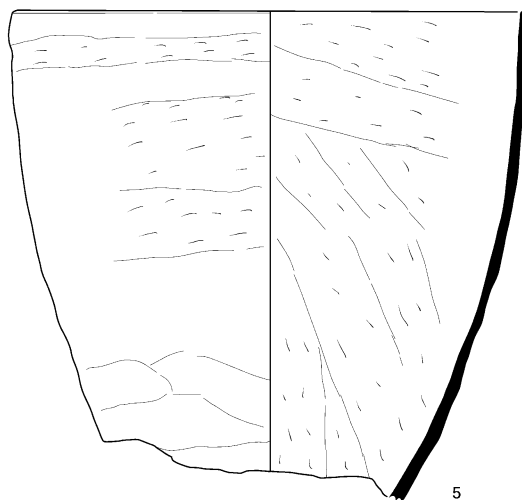


图 42 縄文土器実測図 1 (1 : 4)

土器棺墓3165



土器棺墓3159



土器棺墓3196

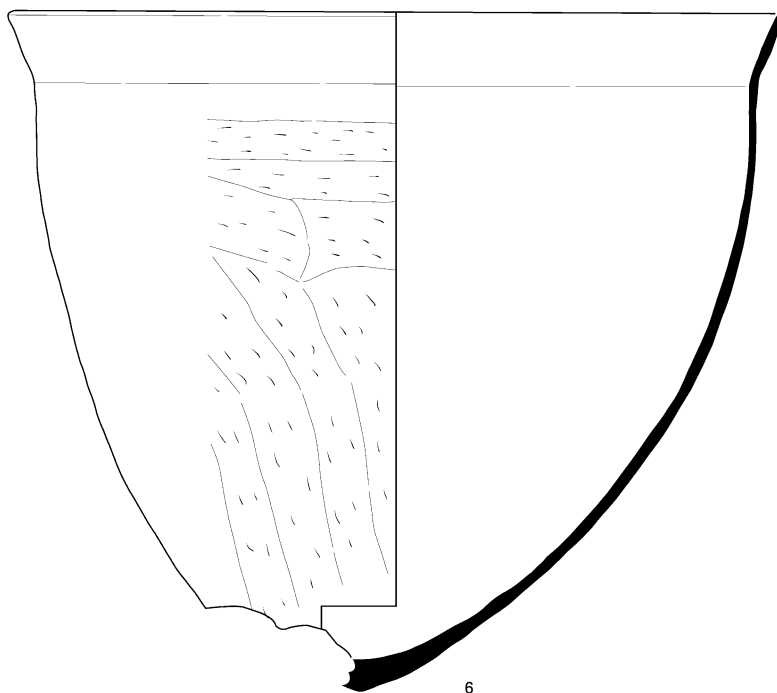
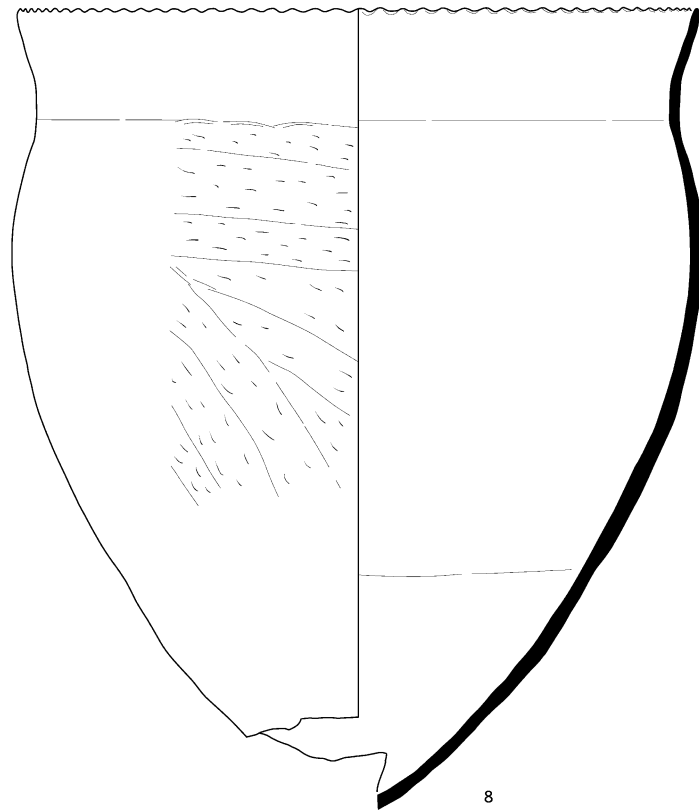
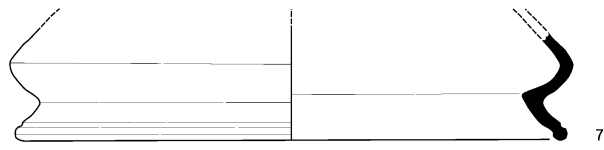
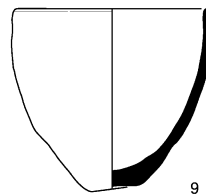


図 43 縄文土器実測図 2 (1 : 4)

土器棺墓3178



土壙墓3253



土壙墓3158

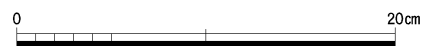
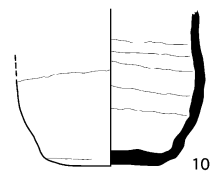


図44 縄文土器実測図3 (1:4)

剥片も目立つ。

石鏃（83～112）石鏃は、基部の形態からA：無茎鏃とB：有茎鏃に分けられ、無茎鏃が大部分を占め、有茎鏃（112）はわずかである。無茎鏃はさらに凹基形（83・84・86・87・89～96・98・99・101～111）・平基形（85・88・97・100）に細分できる。長さ1.5～3.0 cm・幅1.2～1.9 cmで、小型のものが多い。なお、一部を破損したものが多く、未製品も見られる。これらの他に、石鏃を製造する際に発生する剥片が多量に出土した。いずれも石材はサヌカイト製である。

石斧（113・114）石斧は、磨製のもものが2点出土した。いずれも全面を磨いて断面楕円形とし、一端に両凸刃を作り出し、基部を丸く仕上げる。刃の形は円刃である。頂部に打痕が見られるものもある。113は残存長8.9 cm・幅4.4 cm・厚さ3.0 cm、114は長さ10.6 cm・幅4.9 cm・厚さ3.1

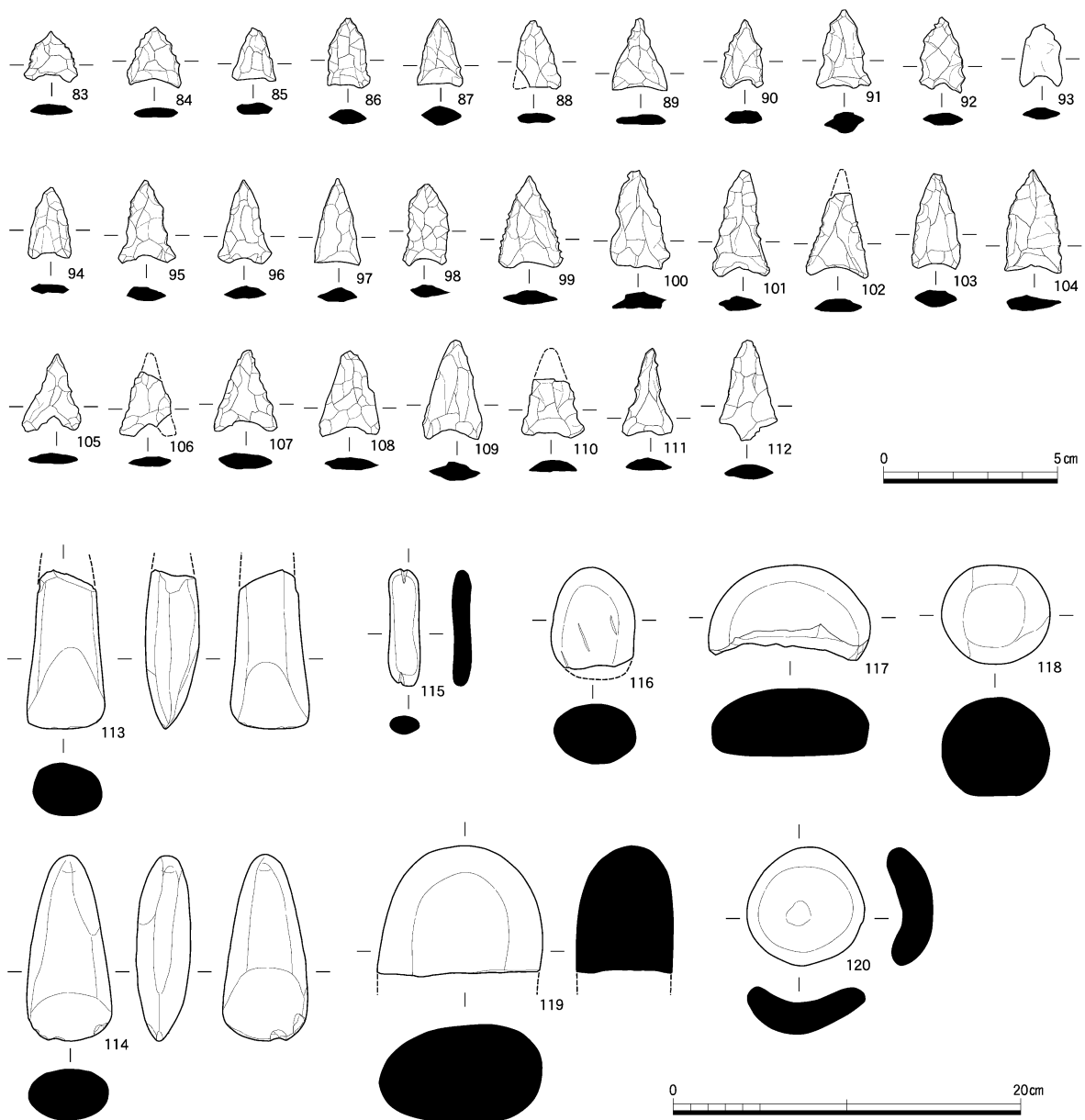


図45 縄文時代石器実測図1（石鏃は1：2、他は1：4）

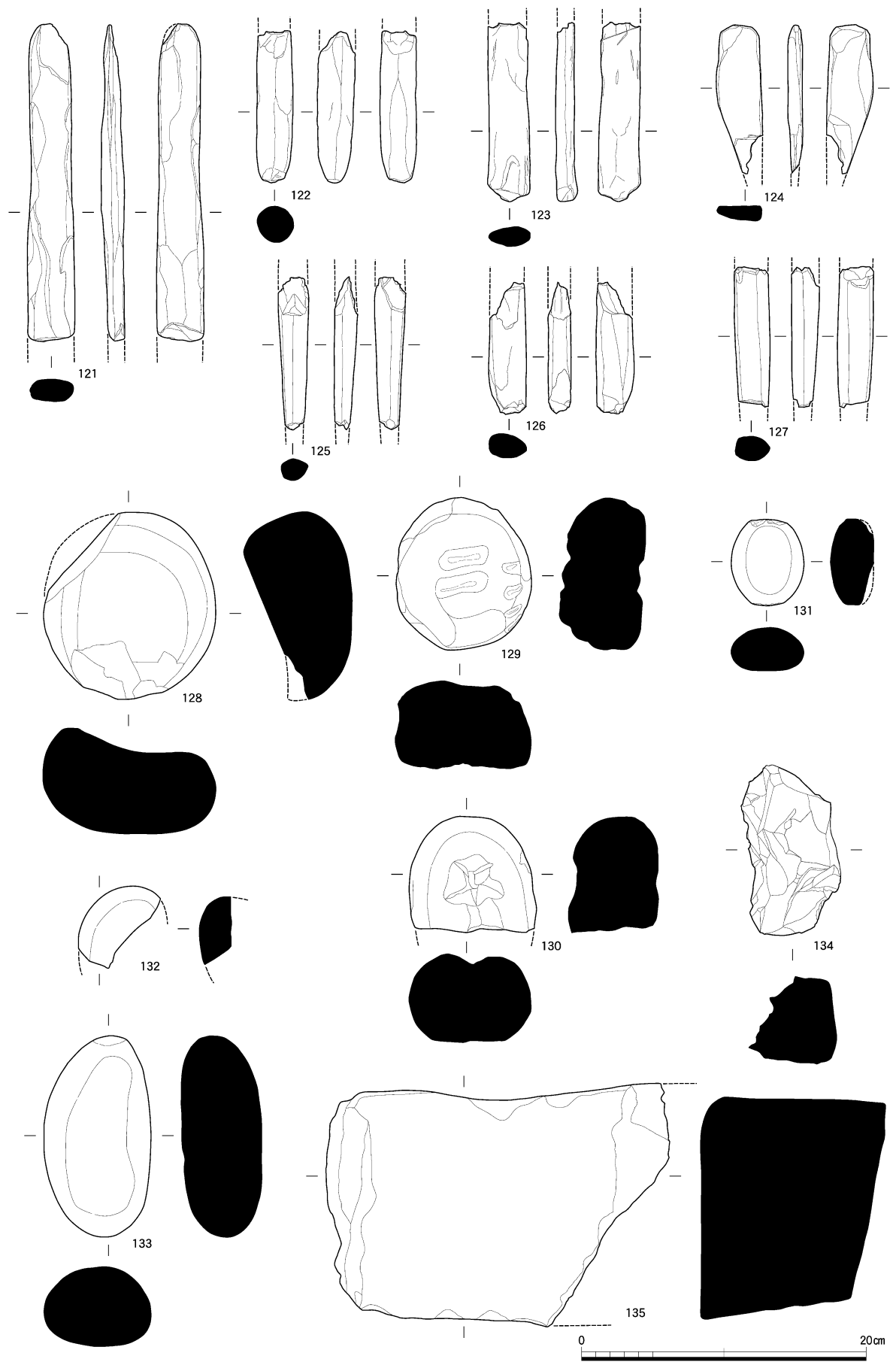


図 46 縄文時代石器実測図 2 (1 : 4)

cmである。

石棒（122）石棒は、破片で全形は不明である。全面を磨いて断面楕円形とし、端部はすぼまる。残存長 10.6 cm・径 2.6 cmである。

石剣（121・123）いずれも破片で全体は不明である。いずれも全面を磨く。121は残存長 22.1 cm・幅 3.3 cm、123は残存長 12.5 cm・幅 3.0 cmである。

石刀（124～127）いずれも破片で、全体は不明である。いずれも全面を磨く。124は残存長 10.4 cm・幅 3.3 cm、125は残存長 10.8 cm・幅 2.1 cm、126は残存長 9.1 cm・幅 2.7 cm、127は残存長 9.8 cm・幅 2.4 cmである。

石皿（128・135）石皿は、地面に置いて使用する大型のものと、手に持って使用する扁平なものがあり、後者が多い。1面を使用し、使用面は凹む。128は長さ 13.1 cm・厚さ 5.7 cm、135は残存長 24.2 cm・幅 16.3 cm・厚さ 13.5 cmである。

凹石（120・129・130）凹石は、扁平で手に持って使用する小型のもので、中央の一部が凹むもの（129・130）、片面がほぼ全域に渡って凹むもの（120）に分かれる。120は長さ 6.6 cm・厚さ 1.8 cm、129は長さ 10.8 cm・厚さ 6.1 cm、130は幅 8.9 cm・厚さ 6.3 cmである。

磨石（116～119・131～133）磨石は、石鏃に次いで多く出土した。円形のものが多いが、楕円形を呈するものもある。全面を磨いて平滑に調整し、表面に擦痕が見られるものが多く、敲痕が残るものもあることから、磨いたり敲いたりして使用したことが明らかである。長さ 6 cm・厚さ 3 cm程度の小型のものから、長さ 14 cm・厚さ 5.5 cm程度のもので、様々なものがみられる。131は楕円形の一方の先端部付近に赤色顔料が付着する。石材は 131は石英である。

石錘（115）石錘は、長円形の体部の両端部に、切り込みが入る切目石錘である。全体を磨いて調整する。長さ 6.6 cm・幅 1.7 cm・厚さ 1.0 cmである。

石核（134）石核は、鉛筆状に打ち欠き、剥片を削り出す。剥離面は明瞭に残る。原石の表面は風化が進んでいる。長さ 11.8 cm・幅 6.2 cmである。石材はサヌカイト製である。

119・133は竪穴住居 3175 床面付近、131・134は竪穴住居 3175 埋土、121は竪穴住居 3223 埋土、113・115は土壙 3254、118は土壙 3254 上層から出土した。その他の縄文時代の石器は、各遺構や包含層から出土した。

（3）弥生時代の遺物

1）土器類（136～172）（図版 33～35、図 47～49）

土器は、土器棺墓 3066・3067・3138・3153 の他、土壙 1209・1292、包含層などから出土した。器形は壺・甕・鉢・蓋などがある。遺存状態は悪く、表面の調整を観察できるものは少ない。

壺形土器（136・137・139・140・144～150・161～172）壺は平底で、体部から頸部にかけてやや直立してから口縁が外反するもの（139）や、頸部から直ぐに外反するもの（137）がある。口縁端部は丸く収めるものと、やや角張るものに分かれる。体部は扁平なもの、やや長胴のもの（136）がある。体部最大径は中央部やや上方にある。

成形は、粘土円盤を底部とし、その上に粘土紐を積み上げる。頸部から体部外面は板状工具でハケ調整の後、全面にミガキを施す。体部内面はオサエの後ナデを施す。

施文は調整後に施し、口縁端部には刻目を施すもの(147)や、沈線を施すものも若干ある。頸部・肩部・体部の施文手法は、次のように分かれる。A：頸部に削出突帯とヘラ描き沈線を1～4条施すもの(147・148)、B：体部と頸部・頸部と口縁部の境に削出突帯をもつもの、C：肩部に幅の狭い削出突帯とヘラ描き沈線を1条施すもの(139)、D：体部に数条の貼付突帯を施し突帯に刻み目を施すもの(162～167)、E：体部に数条の貼付突帯を施し突帯に刻み目を施さないもの(168)などがある。

口径約25～30cm・高さ約42～47cmの前後の大型のものと、口径約10～15cm・高さ約30cm前後の小型のものがある。

139は底部から口縁部にかけての器表面に火を受けた使用痕跡が認められる。

甕形土器(151～155・159・160) 甕は平底で、体部が湾曲して上方に伸び、口縁部はくの字状に外反するものと、水平に近く開くものがあり、後者が多い。端部は丸く収めるものと、やや角張るものに分かれる。体部は張らないものがほとんどである。

成形は、粘土円盤を底部とし、その上に粘土紐を積み上げる。頸部から体部外面はハケ目を施すものが多い。内面はオサエの後ナデを施す。口縁部内面に横方向のハケ目を施すものもある。

施文は調整後に施し、口縁端部には刻目を施すものが多く、沈線を入れるものもある。体部の施文手法は、次のように分かれる。A：無文のもの(151・152)、B：ヘラ描き沈線を1～4条施すもの(153～155・159・160)、C：削出突帯を付けるもの、D：削出突帯や2条以上のヘラ描き沈線間に縦沈線文を施すものなどがある。

口径約25～30cm・高さ約30cm前後の大型のものと、口径約20cm・高さ約25cm前後の中型のものがある。

蓋形土器(143) 蓋は壺用の小型のものが出土した。傘形を呈し、頂部はやや尖がる。口縁部に穿孔がある。成形は手捏ねで、内外面の調整は不明である。口径約12cm・高さ約3cm前後の小型のものである。

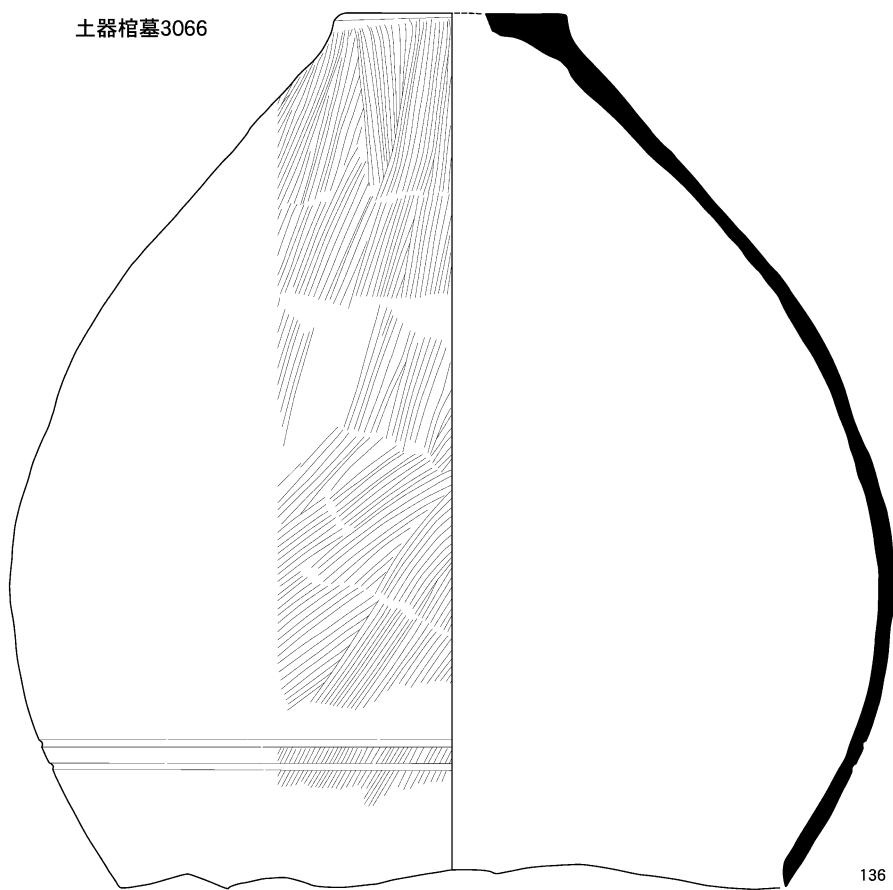
鉢形土器(138・142・156～158) 鉢は平底で、体部は張り出し、口縁部は外反しながら短く立ち上がる。

成形は、粘土円盤を底部とし、その上に粘土紐を積み上げる。頸部から体部外面はハケ目を施すものがほとんどである。内面はオサエの後ナデを施す。把手を貼り付けるものもある(157・158)。

施文は調整後に施す。施文手法は次のように分かれる。A：無文のもの(142・158)、B：体部と頸部の境にヘラ描きによる沈線を施すもの(138)、C：削出突帯上にヘラ描き沈線を施すもの(156)などがある。

口径約36cm・高さ約26cm前後の大型のものと、口径約20cm・高さ約12cm前後の小型のものがある。

土器棺墓3066



136



137



图 47 弥生土器实测图 1 (1 : 4)

土器棺墓3153

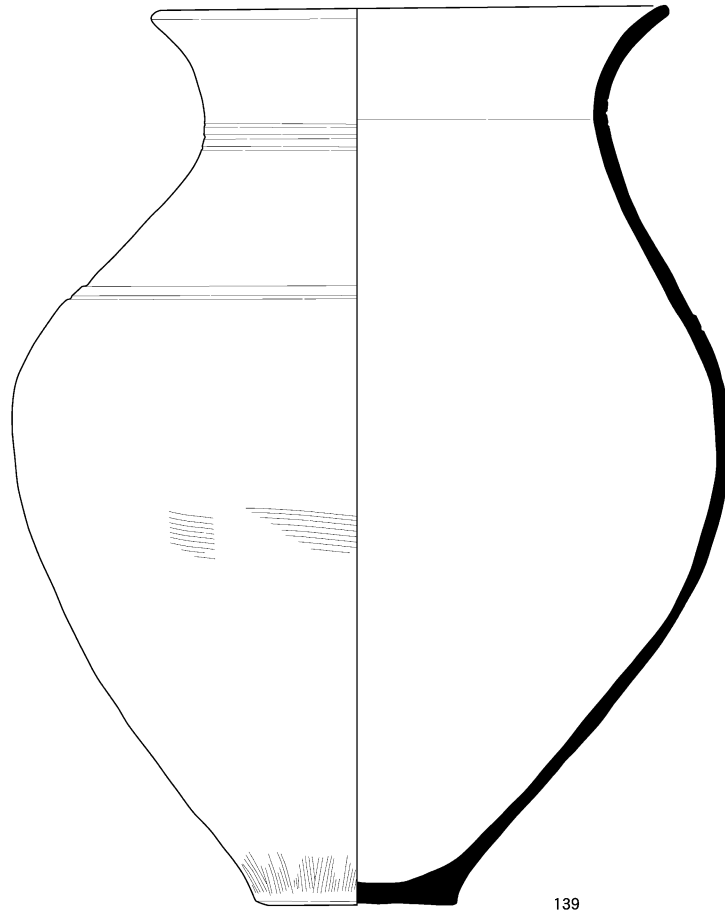
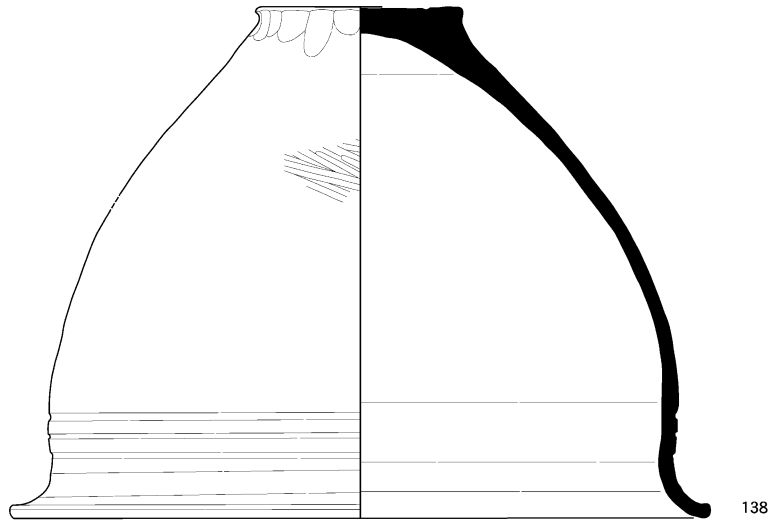
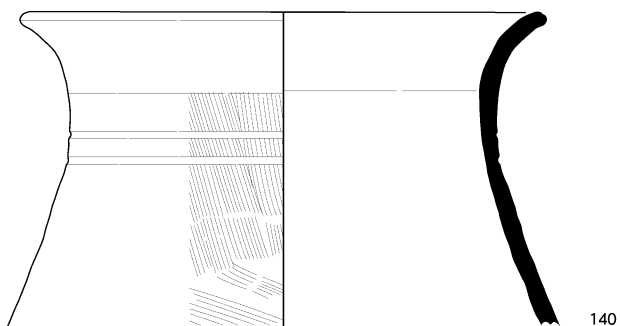


图 48 弥生土器实测图 2 (1 : 4)

土器棺墓3067



土器棺墓3138

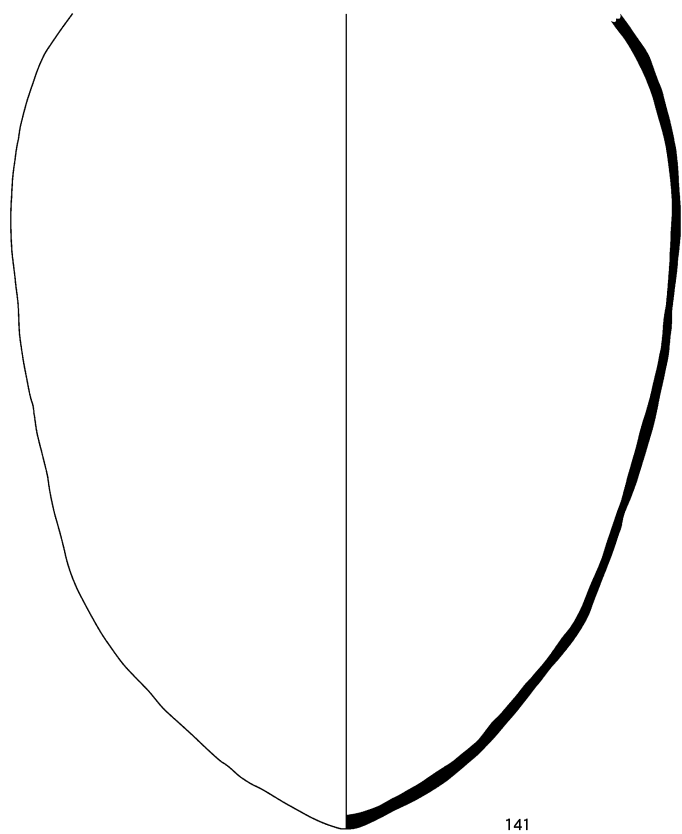


图 49 弥生土器实测图 3 (1 : 4)

その他土器（141）やや長胴の器体をもつもので、肩部付近は丸く張り、底部は押し出し¹⁾により、尖底気味の丸底である。体部外面は条痕による砂粒の移動痕跡が認められ、縄文土器系統の土器である。肩部の張りからみて、壺である可能性が強いが、断定できない。

136・137は土器棺墓3066、138・139は土器棺墓3153、140は土器棺墓3067、141は土器棺墓3138、145・152・155・156・161・166は土壇1209から出土した。その他の弥生土器は、各遺構や包含層から出土した。

（4）古墳時代の遺物

古墳時代の土器類は、溝135・131から少量出土した。器種には土師器・須恵器がある。土師器の器形には甕、須恵器の器形には杯身・甕などがある。

出土遺物の遺存状態は悪く、小片のため図示できるものはない。

（5）長岡京期の遺物

1) 土器類（173～198）（図版36・37、図50）

長岡京期の土器類は、溝1・溝1008などから出土し、特にD区溝1008からはまとまって出土した。他の遺構からは少量しか出土しておらず、小片のため図示できるものは少ない。器種には土師器・須恵器がある。

土師器（173～182）土師器の器形には皿A・椀A・椀B・杯A・甕がある。皿Aは口径15cm前後、高さ2.5cm前後の小型のもの（173・174）と、口径19cm前後・高さ2.5cm前後の大型のもの（175）がある。口縁部やや下にヨコナデを残し他はケズリを施すものと、内外面ともヨコナデを施すものがある。椀Aは口径12.5cm前後、高さ約4cmのもの（176・177）と、口径16cm、高さ5.5cmの大型のもの（178）がある。口縁部やや下にヨコナデを残し他はケズリを施すものと、ナデのものがある。椀B（181）は20cm、高さ6.6cmの大型のものである。底部に高台を貼り付ける。内外面ともに磨滅していて調整は不明である。杯Aは口径16cm、高さ4.2cmのもの（179・180）がある。口縁部やや下にヨコナデを残し他はケズリを施すものと、口縁部までケズリを施すものがある。甕（182）は口径32cmの大型のものである。口縁部は内外面ヨコナデ、体部内外面は板状工具によるハケ調整を施す。

須恵器（183～198）須恵器には皿A・杯A・杯B・杯B蓋・壺L・壺G・壺蓋・鉢Dがある。皿A（183・184）は口径15cm前後、高さ1～3cm前後である。体部内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りである。杯A（185）は口径16.4cm・高さ3.4cmである。焼成不良のため体部内外面の調整は不明である。杯Bは口径12cm前後、高さ4cm前後のやや小型のもの（189）、口径15cm前後、高さ5cm前後のやや大型のもの（190）がある。底部端に外反する高台を貼り付ける。体部内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りである。杯B蓋は径12cm前後、高さ1cmの小型のもの（186）、径17cm前後、高さ2cm前後の中型のもの（187）、径20cm前後の大型のもの（188）がある。天井部が低く立ち上がり扁平な宝珠形のつまみが付く。内外面ともロクロナデを施す。壺蓋は、径約

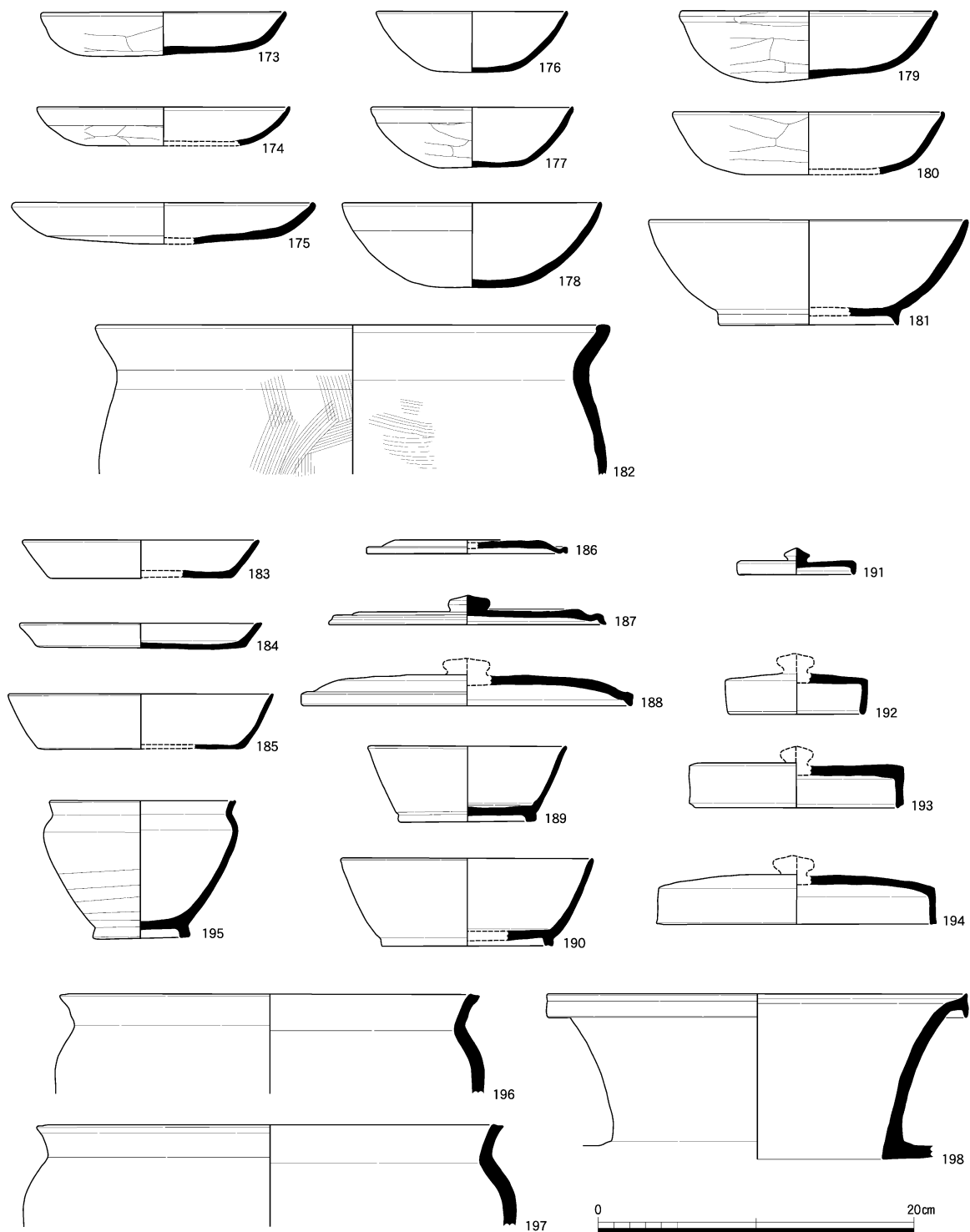


図50 長岡京期土器実測図(1:4)

7～8cm前後の小型のもの(191)、径約12cm前後の中型のもの(192)、径17cm前後の大型のもの(193・194)がある。天井部が平坦で端部は垂下する。宝珠形つまみが付くものと付かないものがある。内外面ともロクロナデを施す。壺Lは口径26cm前後のものである。内外面ともロクロナデを施す。鉢Dは径11cm前後の小型のもの(195)と、径25～28cmの大型のもの(196・197)がある。195は底部に外反する高台を貼り付け、体部は直線的に立ち上がり、肩部で最大

径となり外反する口縁部が付く。口縁部・体部内外面ともロクロナデを施す。甕（198）は口縁部内外面ともロクロナデ、体部は外面平行タタキ、内面同心円タタキを施す。

190・195 は溝 1、174・175・181・182・188・193・197・198 は溝 1008 から出土した。その他の長岡京期の土器は、各遺構や包含層から出土した。

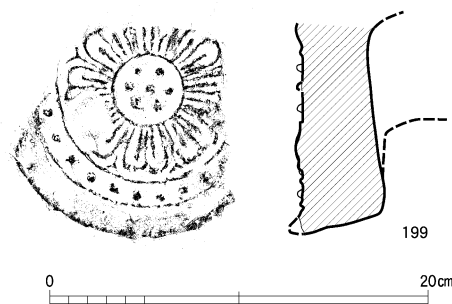


図 51 軒丸瓦拓影・実測図（1：4）

2) 瓦類（199）（図版 37、図 51）

瓦類は溝 1・溝 1008 などから少量出土した。種類には、軒丸瓦 1 点と、他に平瓦・丸瓦などがあるが小片が多い。

軒丸瓦（199）複弁 8 弁蓮華文軒丸瓦。中房には 1 + 6 の蓮子がある。複弁 8 弁で弁はやや盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。瓦当裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合。瓦当部側面ヨコナデ、裏面ナデを施す。平城宮式 6311 A 型式。奈良時代に属する。溝 1 から出土した。

3) 土製品

土馬が 1 点出土した。粘土板を折り曲げて頸部に挟み込む都城型土馬である。頭部が溝 1 から出土した。竈の破片が出土した。裁頭砲弾形の一側面を切り取り底を貼り付ける。

4) 木製品（200～203）（図版 37）

木製品には、柱・礎板などがある。柱（200～203）は写真のみ掲載した。いずれも掘立柱建物の柱で、200 は掘立柱建物 1060 の身舎南側東第 2 柱、201 は掘立柱建物 1060 の身舎南側東第 4 柱、202 は掘立柱建物 1060 の身舎南東隅柱、203 は掘立柱建物 1646 の身舎南側東第 4 柱である。

註

- 1) 底部の成形過程で、内側から外へ押し出し、丸底とした痕跡が明瞭に認められ、土師器長胴甕の底部製作技法に類する。

平尾政幸「畿内の土師器甕の製作技法」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 4 煮沸具—』
古代の土器研究会 1996 年

5. まとめ

今回の調査では、3時期にわたる遺構を検出し、当地域の変遷をうかがううえで貴重な成果を得ることができた。ここでは、概述の調査成果と合わせて、明らかとなったことを述べる。

(1) 縄文時代の上里遺跡

D・E区東側で、縄文時代の集落の一部を検出した。集落は小畑川の西岸段丘上に位置し、遺構面は東へ下がる傾斜地となる。遺構の残存状況から考え、元来の地形が傾斜していたと想定でき、このような立地の場所に集落が営まれたことが明らかとなった。また、調査地北東部では大規模な落込みを埋めて整地し、住居・土壇などを作る。

調査では、竪穴住居・土器棺墓・土壇墓・土壇などを検出したことから、集落内でも中心付近であると推定できる。ただし、住居はかなり近接して検出し、同時期に存在したとは考えられず、また、上面が削平を受けた住居も多く、床面上で検出した土器もほとんどないことから、明確な時期が明らかでなく、住居の同時性や居住域と墓域との時間的・空間的關係は、現在の段階では不明な点が多い。

竪穴住居の特徴は、形態が多様であること、中央に炉を持つものと持たないものがあること、柱穴位置が均等な間隔でなく不明確なものが多いこと、壁面が緩やかに傾斜し、壁溝を持たないことなどがあげられる。当該期の住居の調査事例が畿内では少ないことから、今回の調査成果は、住居の構造や規模を知る上で大きな意義があるといえよう。

墓域は調査区北東部と、東中央部に大きく分かれ、それぞれ土器棺墓と土壇墓がみられる。北東部では、土器棺の据付け方向が土器棺墓 3164・3196 は北東方向で、土壇墓 3253 も同方向であり、これらがまとまりをもつ可能性が高い。東中央部では土器棺墓 3178・3159、土壇墓 3158 は北西方向で、まとまっている。

遺物については、各遺構から多量の縄文土器が一括して出土した。当地域における基準的な資料となろう。土器の出土量からみて、縄文時代の集落は晩期前葉段階（落込み 3254 下層）から始まり、晩期中葉（土器棺墓など：滋賀里Ⅱ式～Ⅲ式）に展開し、その後断絶する。

出土土器には、角閃石を含み褐色を呈する生駒西麓産の土器をはじめ、他地域からの搬入土器や、また他地域の影響を受けたと考えられる土器などが少なからず含まれており、各地との交流関係がうかがわれる。

また、石核が数点出土し、剥片や未製品が多いこと、砥石・磨石などが出土したことから、集落内で石器が製作されたと推定できる。

弥生時代前期・長岡京期の遺構面と縄文時代の遺構面の間には、黄色砂泥を中心とする層が堆積する。この層については、全く遺物を含んでおらず、ブロック状の土塊もみられず、人為的に埋められたものではないことは明らかである。層中の土は下の方が粒子が粗く上に行くに従って細くなること、また、所々に礫のブロックが見られることから、小畑川の氾濫により、ゆるやかに堆積したと思われる¹⁾。この際に遺構面が削平を受けたと考えることができる。D・E区西側

については、長岡京期に削平を受けており、集落の西限は不明である。

このように今回検出した集落が比較的まとまった時期を示し、それ以前、それ以後が断絶することは、ある程度の期間の定住の後、移動が行われたことを示唆する。調査地周辺の縄文時代の遺構には、約 400 m 西側の R 772 調査で晩期後半から末の土器棺墓や土壙墓、200 m 南側の R 25 調査では中期末から後期にかけての土壙・柱穴を検出し、それぞれの時期の集落が存在していた可能性が高い。さらに、上里遺跡周辺で確認されている当該期の主な集落は、向日市森本遺跡、中野遺跡、長岡京市今里遺跡などがある。これらの遺跡は上里遺跡を中心に半径 2 km の範囲に分布しており、このような分布は集落のあり方に何らかの示唆を与えるものである。

(2) 弥生時代の上里遺跡

C 区東側から D・E 区にかけて、弥生時代の遺構を検出した。集落は小畑川の西岸段丘上に位置し、遺構面はほぼ平坦である。遺構の分布密度はかなり高いが、C 区より西側では遺構・遺物ともに発見していないことから、集落の西縁辺部にあたと推定できる。また、凹地には土を埋めて整地を行った部分も見られる。

調査では、土器棺墓・柱穴・土壙・炉などを多数検出した。ただし、遺構の残存状況から、遺構面は上面がかなりの削平を受けていたと考えられ、竪穴住居や平地式住居などを明確に確認することができなかった。このため、住居の同時性や居住域と墓域との関係は、現在の段階では不明な点が多い。また長方形の土壙は、その形状などから土壙墓の可能性が考えられる。

遺構分布の疎密から、四箇所程度のまとまりが考えられる。調査地西北部にみられる柱穴群のまとまり、中央部の柱穴群と土器棺墓・土壙墓で構成されるまとまり、その東部の柱穴群と土器棺墓で構成されるまとまり、東南部の土壙群などのまとまりである。これらのまとまりの中には炉や土が焼けた痕跡が数箇所見られ、居住域を想定することはできるが、具体的な内容にまでは言及できない。

土器棺墓は、D・E 区の北西部と、北東部に分かれ、それぞれで土器棺墓 2 基を検出した。土器棺の据付け方向は異なるものの、これらがまとまりをもつ可能性が高い。

土器類は土壙などからまとまって出土し、当地域の弥生時代前期の土器様相が明らかとなった。出土土器の中には、生駒西麓産の土器はほとんどなく、縄文土器と対照的である。土器の出土量からみて、弥生時代の集落は畿内第 I 様式中段階から始まり、新段階に展開し、その後断絶する。このように今回検出した弥生時代の集落は縄文時代と同様に、比較的まとまった時期を示し、それ以前・それ以後が断絶する。

調査地周辺の弥生時代の遺構には、約 400 m 西側の R 772 調査で、後期の方形周溝墓や溝・流路など、200 m 南側の R 25 調査では前期の流路を検出している。乙訓地域弥生時代前期の拠点集落として知られる、長岡京市雲宮遺跡・向日市鶏冠井遺跡では、畿内第 I 様式古段階から営まれており、より新しい段階の遺跡である上里遺跡の集落は、これらの拠点集落から小畑川を遡上して、新たな集落を展開した可能性が考えられる。

(3) 長岡京期の遺構

1) 条坊について

一条大路について

調査地の北端で溝1を検出し、約220m間連続する。溝1は、R772・R850調査で検出した一条大路南側溝に連続しており、これまでの長岡京条坊復元推定位置から考え、一条大路南側溝と判断した。当地域の地形は、西から東に傾斜しており、一条大路南側溝もこれに沿って、次第に下がるように造られていることが明らかとなった。なお、推定西三坊坊間小路路面上では途切れずに通じている。

一条大路南側溝の方位は、R772調査A13～16区で検出した溝1中央と今回調査のD区溝1西端中央を結んだ直線は、西で北へ0度5分12秒振れる（最小2乗法による）〔表3〕。この成果と、左京でこれまで明らかとなっている条坊側溝の成果を合わせた結果でも、西で北へ0度4分45秒振れ、今回出した成果が妥当であることを示す²⁾。ちなみに、以前東二坊大路の東側溝で検討した結果では、方位は北で西へ0度3分24秒振れ、若干異なる³⁾。

一条大路南築地について

溝1から南に約4mの位置で東西方向の溝1008を検出した。この溝は、溝1に平行することから、内溝と考えられる。また、両溝間には柱穴列1002を検出した。柱穴列1002は、R850調査B・C区検出の柱穴列2011と同様であることから、築地側柱列と考えられその間を築地と推定した。

R850調査B・C区では、南側溝に伴う築地・内溝は、九町宅地内の建物の存在した部分のみに造られていたが、今回の調査でも同様に、八町宅地内の建物の存在した部分のみに造られていたことが明らかとなった。

一条大路南側溝（溝1）の幅は、約1.5mである。側溝南肩から柱穴列1002北側柱列までの距離は今回は約0.5～1.1m、R850調査B・C区では約0.5m。築地幅（1002の北側柱列と南側柱列間の距離）は、今回は約1.0～1.8mであるが、R850調査B・C区柱列2011は約1.0mである。これらを平均すると、側溝半分が0.75m、犬行が0.8m、築地半分が0.7mで、築地心から南側溝中心までは2.25m（築地半分+犬行+側溝半分）となる。

西三坊坊間小路

西三坊坊間小路の両側溝を検出した。西側溝（溝42）は南へ13.5mまで、東側溝（溝1049）は南へ18.2mまで検出したが、それより南側は同一の高さであるにもかかわらず未検出である。このことから、側溝は一条大路から南側では一部しか造られていないことが明らかとなった。この状況は西三坊大路でも同様である。

当地域の条坊道路は、①施工されたことが確認できた道路〔一条条間南小路（西四坊大路～？：R746）・一条大路（西四坊坊間小路～西三坊坊間小路～？：R772・850・878・746）・西三坊大路（一条大路から南60mまで検出、以南は無し。：R772・775）・西三坊坊間小路（一条大路から南16mまで検出、以南は無し。：R746）・西二坊大路（二条条間北小路～二条条間大路：）

表3 一条大路南側溝成果表

右京のみの結果

調査次数	X (m)	Y (m)	近似直線との距離 (m)
R772 M1	-116,937.64	-28,759.15	0.10
R772 M3	-116,937.04	-28,852.85	0.10
R772 M4	-116,937.20	-28,940.25	0.08
R850 A区西端壁際	-116,937.34	-28,701.71	-0.42
R878 C3区北端	-116,936.48	-28,387.80	-0.03
R878 D区東端	-116,936.20	-28,334.20	0.16
傾き	傾き標準誤差	X切片	X切片標準誤差
0.001513	0.000416	-116,893.50	11.92
傾き (度)	0.087	傾きの標準誤差 (度)	
0 度 5 分 12 秒		0 度 1 分 26 秒	

全体での結果

調査次数	X (m)	Y (m)	近似直線との距離 (m)
L118	-116,933.19	-26,285.87	0.46
L130	-116,933.30	-26,248.87	0.31
L130	-116,933.20	-26,222.27	0.37
L169	-116,933.80	-26,066.57	-0.45
L121	-116,932.41	-26,050.87	0.93
L89	-116,933.41	-26,025.87	-0.11
L401	-116,933.73	-25,621.88	-0.99
L286 中	-116,932.32	-25,149.88	-0.23
R772 M1	-116,937.64	-28,759.15	-0.57
R772 M3	-116,937.04	-28,852.85	0.15
R772 M4	-116,937.20	-28,940.25	0.12
R850 A区西端壁際	-116,937.34	-28,701.71	-0.35
R878 C3区北端	-116,936.48	-28,387.80	0.08
傾き	傾き標準誤差	X切片	X切片標準誤差
0.001380	0.000099	-116,897.38	2.69
傾き (度)	0.08	傾き標準誤差 (度)	
0 度 4 分 45 秒		0 度 0 分 20 秒	

(R 574・511))、② 施工されたと推定できる道路〔西三坊坊間東小路（一条大路～二条大路？：R 22・25)〕、③ 施工されていないと推定できる道路〔西四坊坊間小路（一条大路以南無し：R 772)・西四坊坊間東小路（一条大路以南無し：R 772)・二条条間北小路・二条条間大路・二条条間南小路〕があり、施工された道路と未施行道路が多様な様相を示している。今回検出した西三坊坊間小路は途中で途切れ、当地域での複雑な状況を再確認した。

2) 八町北東部について

八町北東部

九町北中央部では、一条大路に沿って掘立柱建物群をまとまって検出した。これらの掘立柱建物の位置関係や柱筋を検討すると、建物 1060・3003・3057 の身舎はほぼ東西に揃い、柱筋もほぼ通っている。建物 3003 は西側が明らかではないが、おそらく建物 3057 と同形同大の建物を東西に並べたと考えられる。また、建物 1060 と建物 1646、建物 3057 と建物 9 は南北筋を通し、さらに建物 1646 と建物 9 は東西筋も揃える。また、建物 1060 は R 850 調査建物 1139 と同様に甕据付跡が残る。

このように、これらの建物群は柱筋を揃えて整然と建てられていることから、計画的に配置されたことを示唆する。また、建物の方位がいずれも正方位であり、一つの時期にまとまると推定できる。ただ、九町の中心線は、掘立柱建物 1139 の東妻柱付近にあり、建物配置は四行八門制には当てはまらず、一町の西側 3 分の 1 は空閑地として残されていたと考えられる。現在の段階では九町全体の配置が不明なため、町内の宅地利用については不明な点が多い。

いずれにしても、これらの建物群は九町の北部中央に集中することや、北側に築地相当施設があることから考え、一条大路に配慮した配置と推定することができよう。ただ、九町南東側の R 22・R 25 調査の二町では、1 町占地の官衙と推定される施設を検出しており、これとの関係をも考える必要があるだろう。

註

- 1) (財)向日市埋蔵文化財センター 中塚 良氏のご教示を得た。
- 2) 上田郁子「長岡京北辺域の条坊」『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区』古代学研究所研究報告 第 7 輯、古代学協会、2002 年。
- 3) 上村和直「まとめ 3 長岡京期」『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 17 冊、京都市埋蔵文化財研究所、1998 年。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょうにじょうさんぼうはち・きゅうちょうあと、かみさといせき							
書名	長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-34							
編著者名	上村和直・南出俊彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 かみさといせき 上里遺跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおほらのかみさとみなみ 大原野上里南 のちょうちない・ ノ町地内・ ながおかきょうしいの 長岡京市井ノ うちきたうら 内北裏	26100	1047	34度 56分 43秒	135度 41分 21秒	2006年6月 12日～2007 年3月16日	3,329㎡	道路新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上里遺跡 長岡京跡	集落	縄文時代	竪穴住居・土器棺墓・土壇墓・土壇・柱穴・落込み	縄文土器・石器		西日本ではほとんど検出されていない、縄文時代晩期中葉の住居跡を発見した。		
		弥生時代	土器棺墓・土壇・溝・柱穴	弥生土器		集落の一部が明らかとなった。		
		古墳時代	溝	土師器・須恵器				
	長岡京期	長岡京期	掘立柱建物・柵・柱穴・溝・築地・道路・土壇	土師器・須恵器・土製品・瓦・木製品		道路と宅地内の様子が明らかとなった。		
		長岡京期以降	小溝	土師器・瓦器・銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-34
長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡

発行日 2007年5月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961